

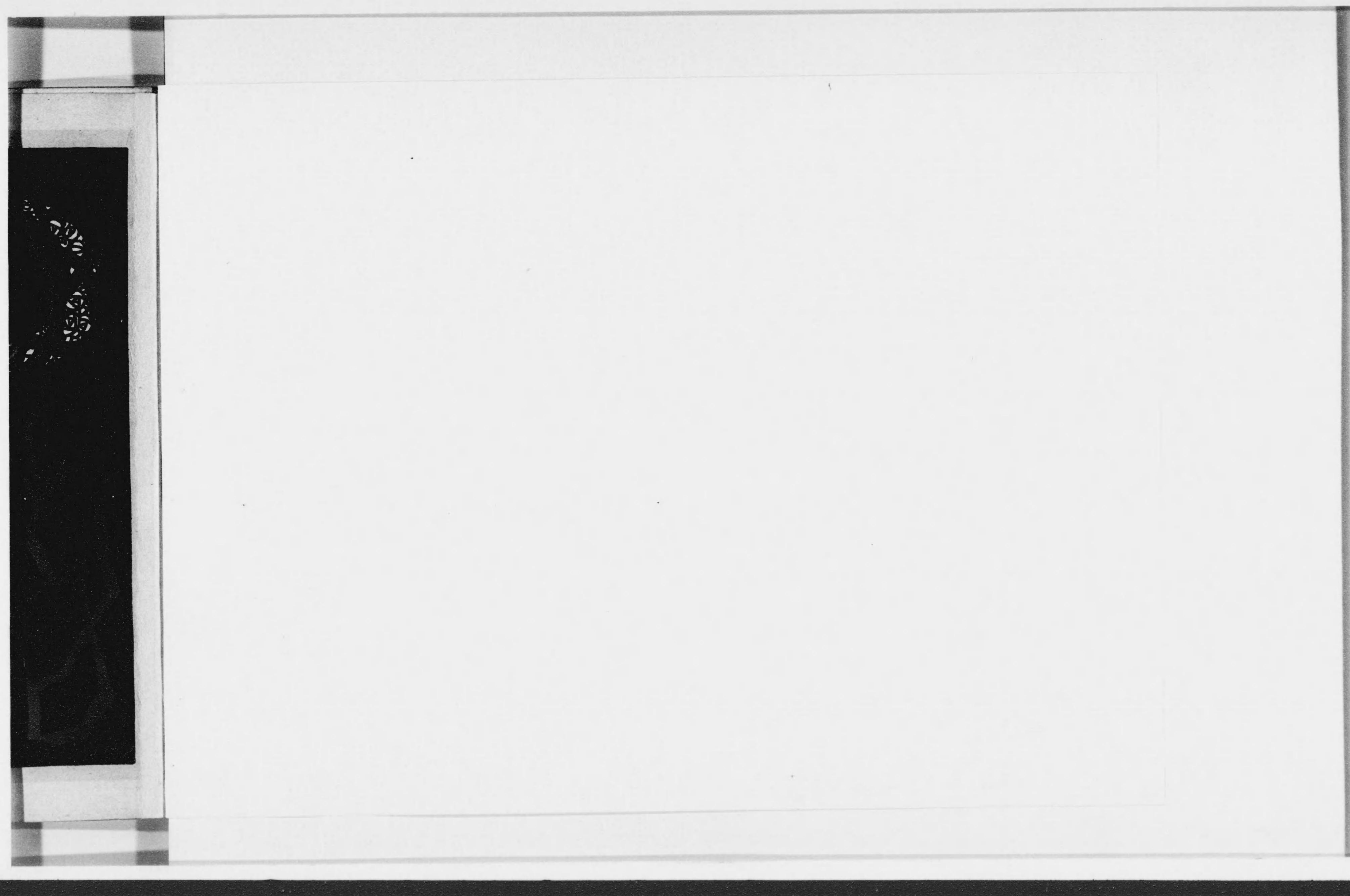
337
386

京王電車回顧十五年

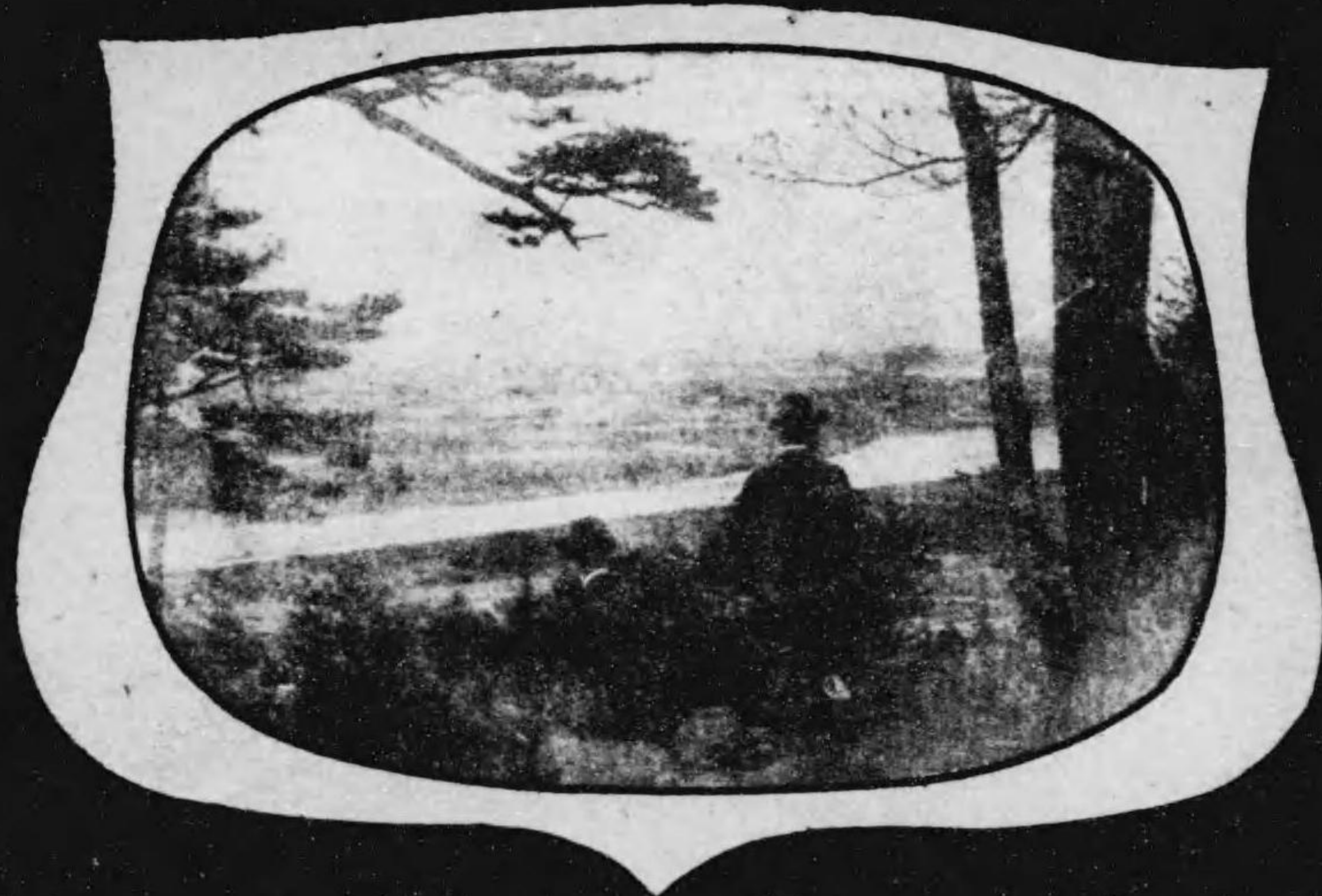
国立国会図書館

5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20

337
386



R.E. 4L-98



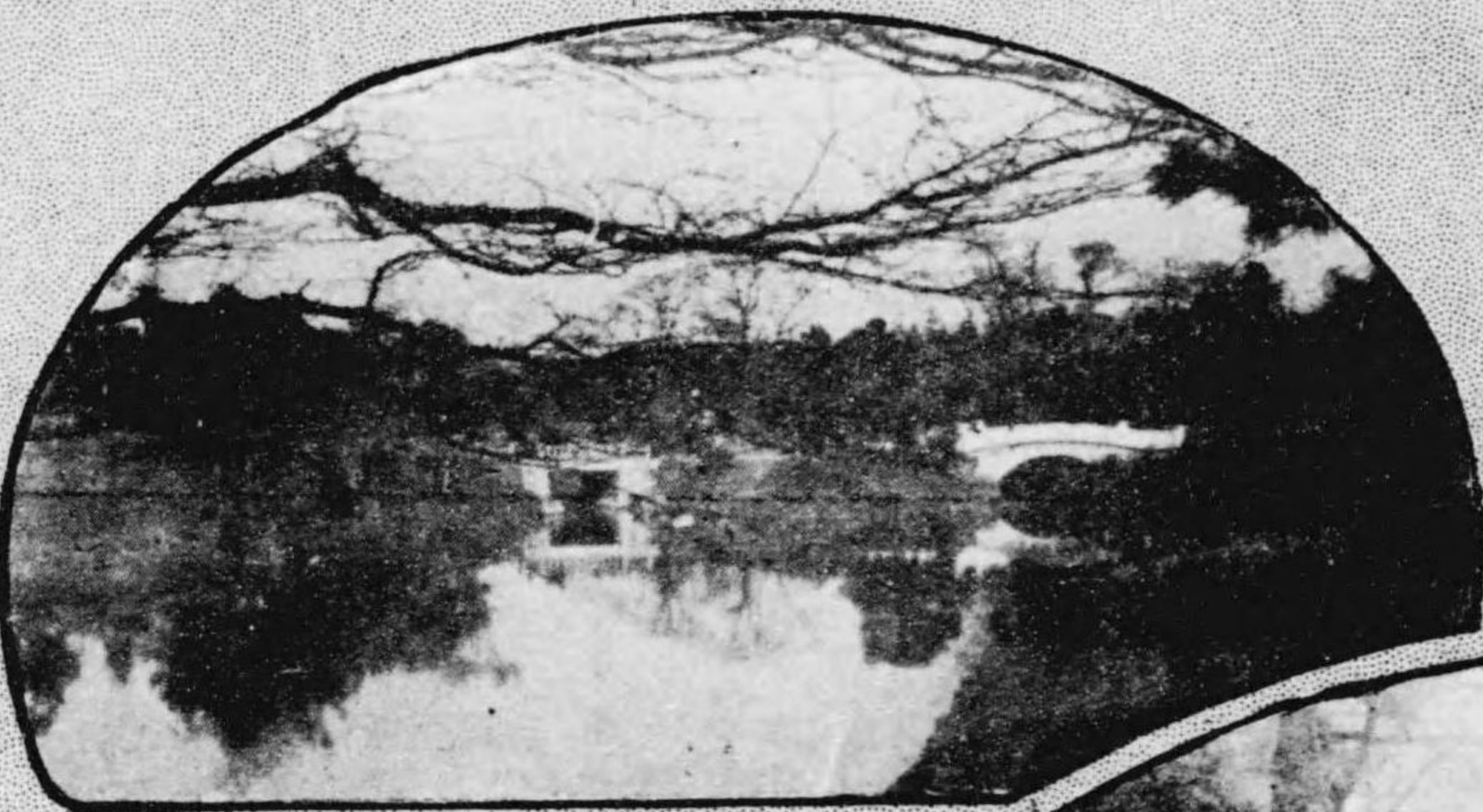
京王露車回顧五十番



大國魂神社

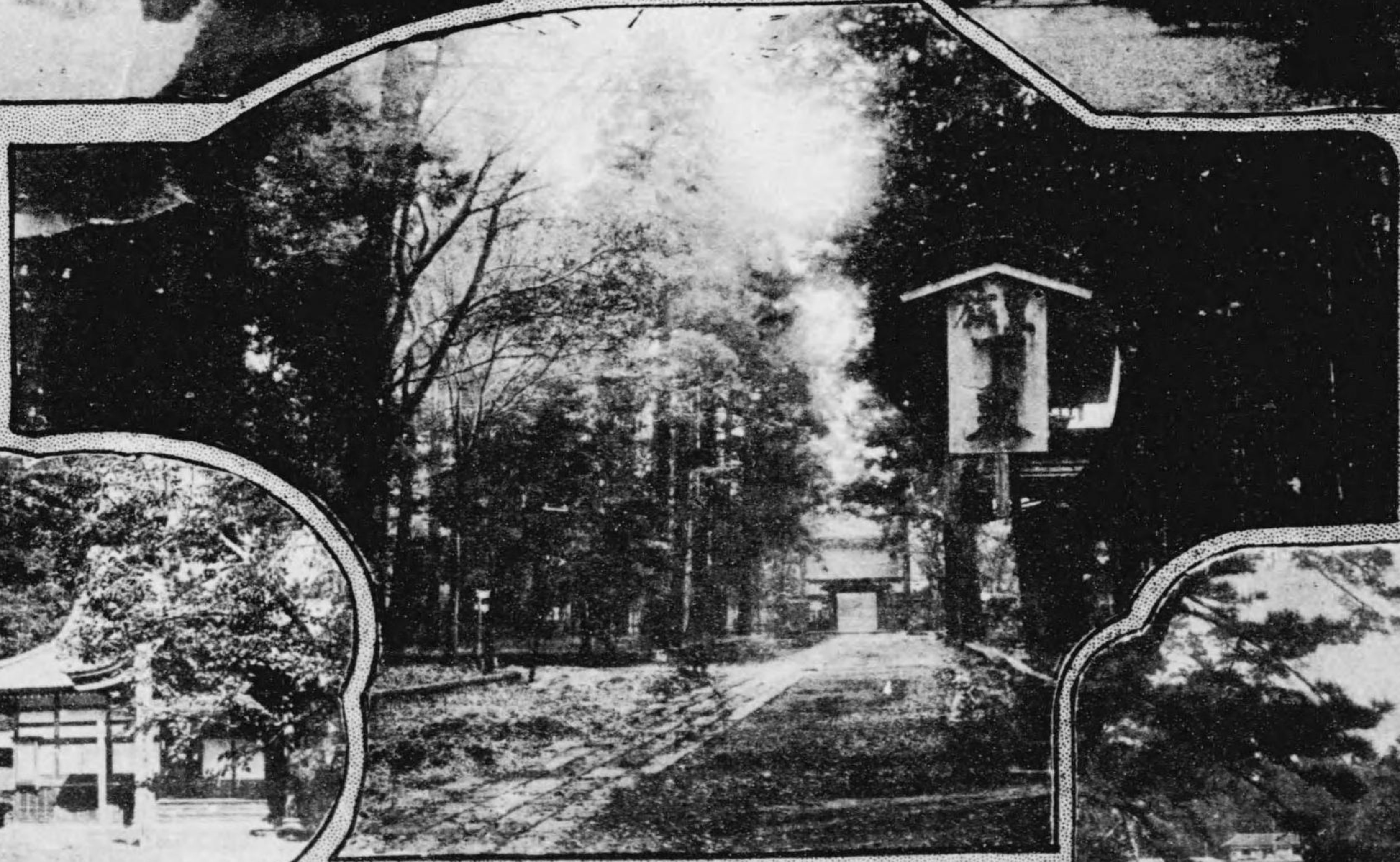


中府大國魂神社
境内



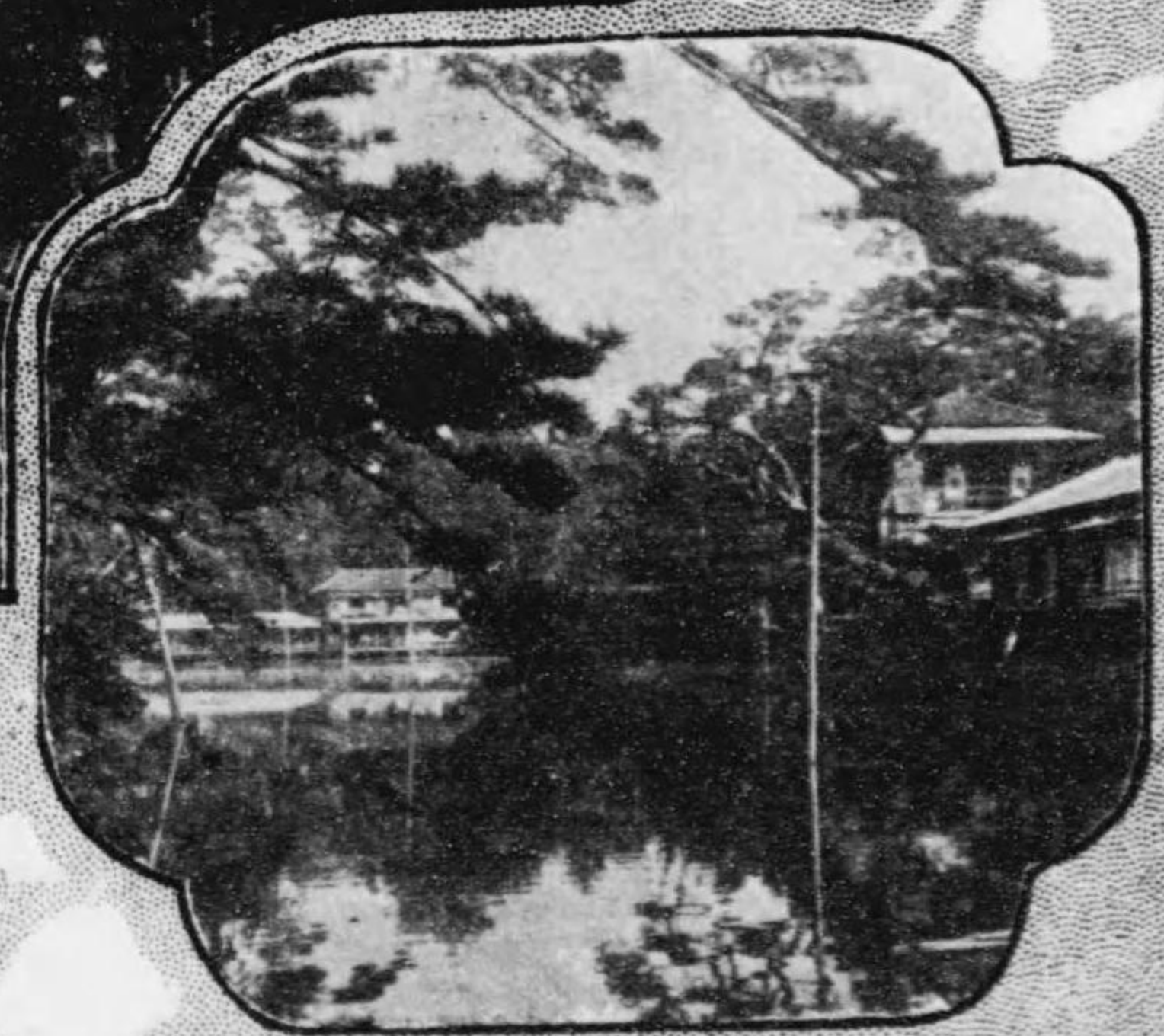
明治神宮紀念館前の庭園
(神宮裏下車約六町)

十二社
旗亭
(神宮裏下車五町)



深大寺
調布下車乗合自動車
の便あり
(柴崎又は布田下
車も可なり)

東京王薨車
沿線の后勝

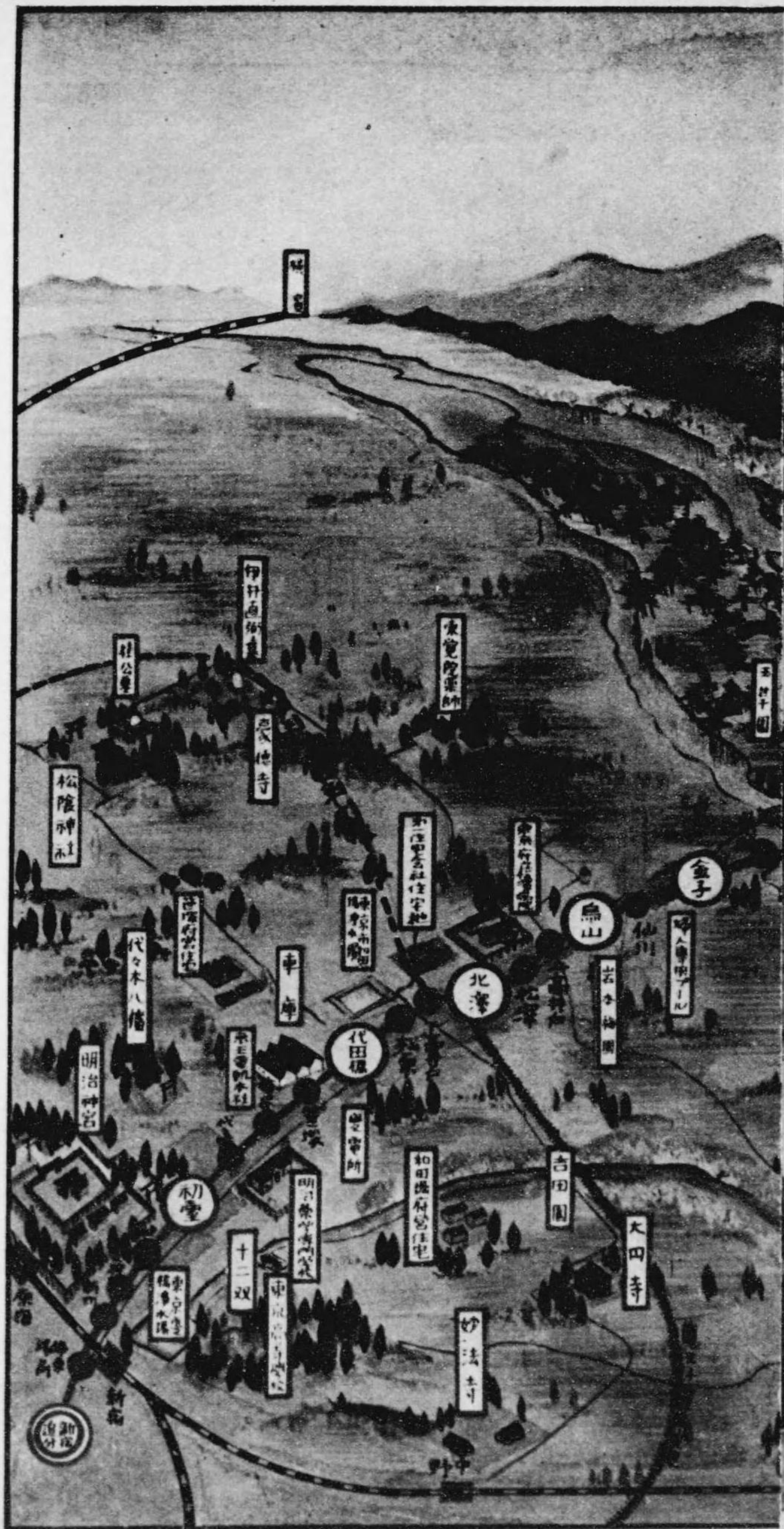
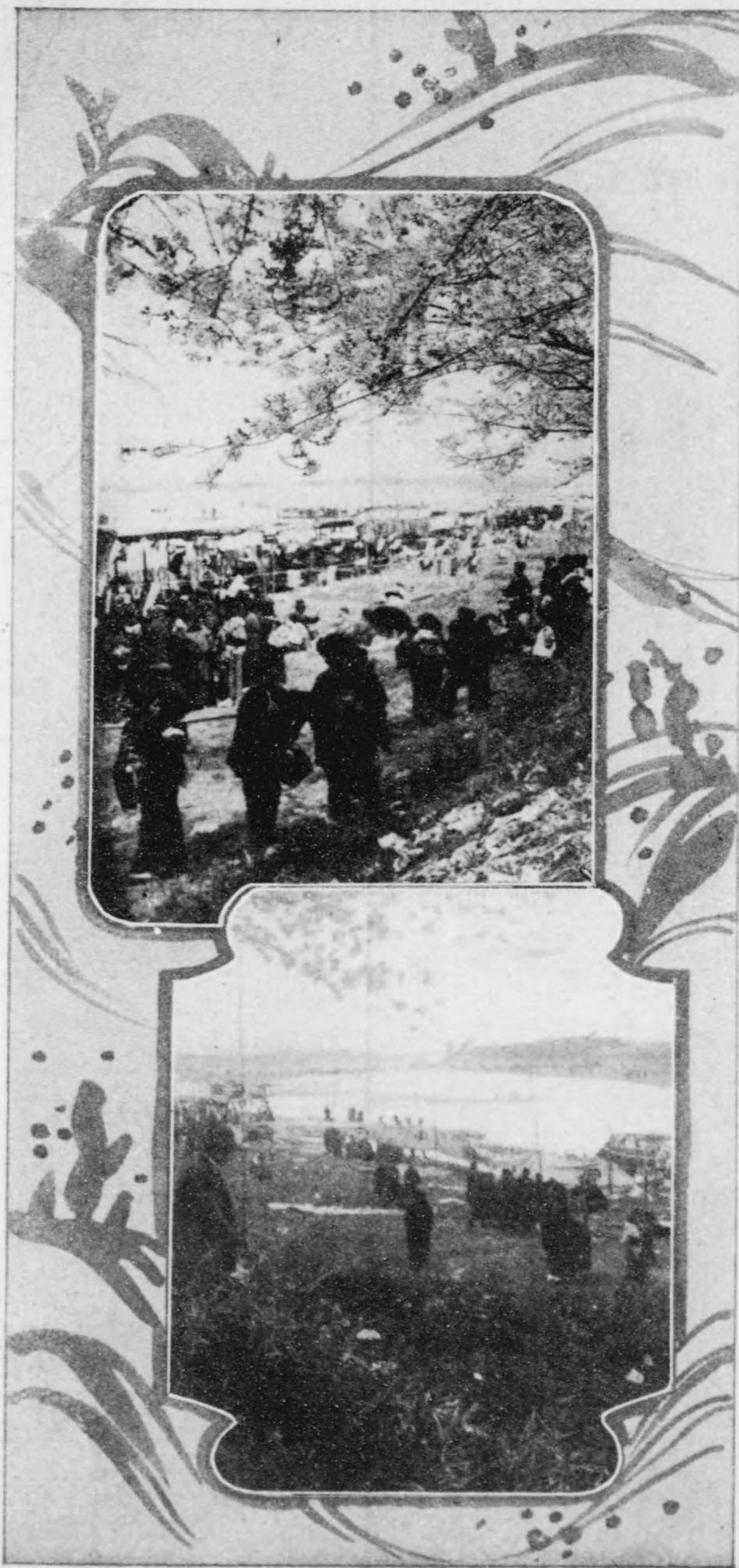


多摩川原遊園地に於ける芋掘遊び

調布から見たる稲田堤

矢口ノ渡の鮎釣

稲田堤の櫻と花見る人



多摩川原遊園地に於ける芋掘遊び



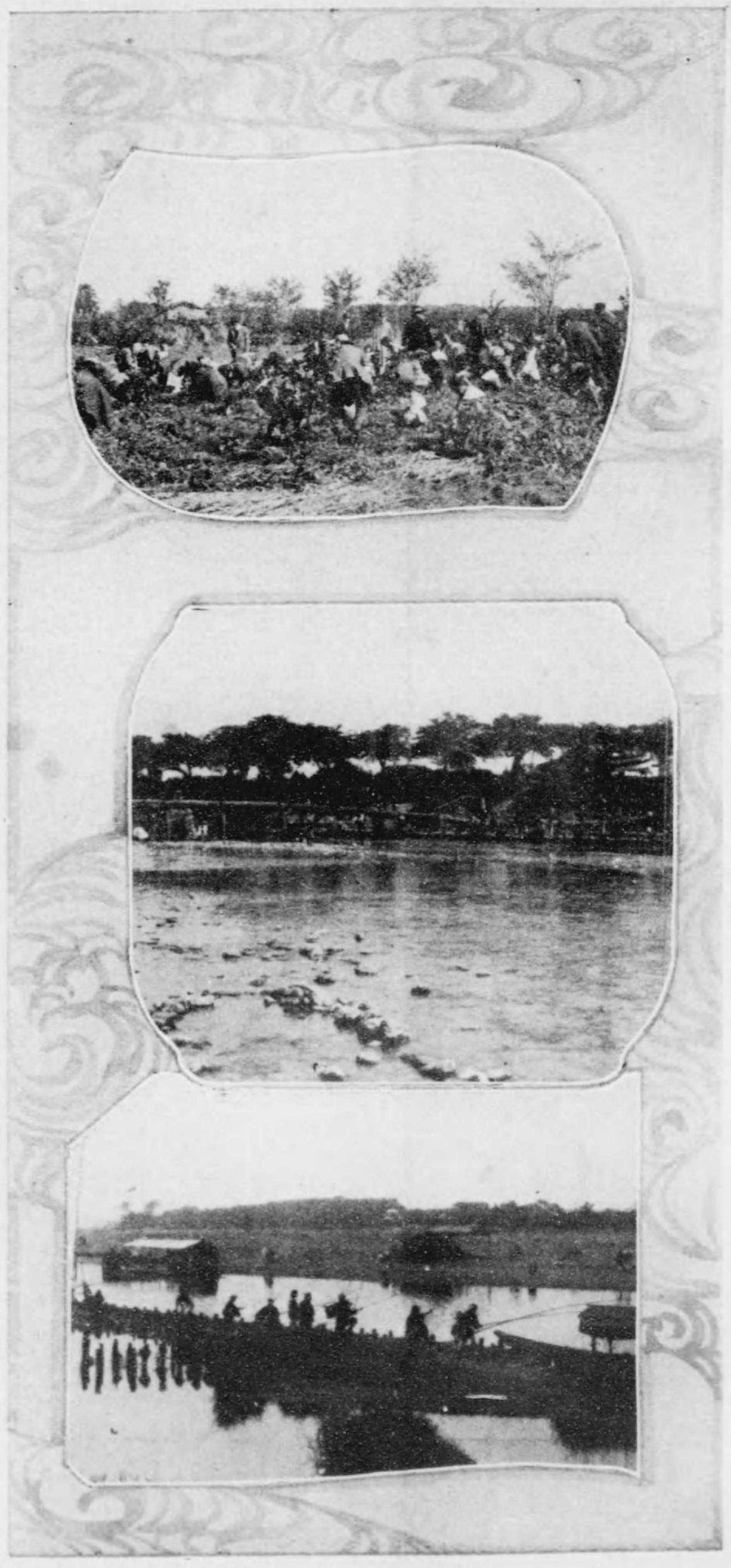
調布から見たる稲田堤

矢口ノ渡の鮎釣

明治神宮記念館前の庭園
(神宮裏下車約六町)



深大寺
調布下車乗合自動車の便あり
(柴崎又は布田下車も可なり)



多摩川原遊園地に於ける芋掘遊び

調布から見たる稻田堤

矢口ノ渡の鮎釣

稲田堤の櫻と花見る人



337-386

車電王京



同

順

率五十





京王電車



五十車



京王電気軌道株式會社
通稱 京王電車株式會社

目次

1 京王電車の生ひ立……………一
創業當初の艱難と會社再生の恩人
井上專務就任後面目一新
更に社業の充實を圖る

2 京王電車の業績……………四
乗客二千百萬人……………四
毎年平均二割以上の増加率
五年後には三千三百萬人以上
一車一哩當り乗客數と賃金
多摩川砂利の搬出……………五
貨物運賃も年は六七萬圓
帝都復興と砂利需要激増の對策
點火電燈八萬燈……………七
五年後には卅萬燈を突破せむ
供給動力二千餘馬力……………八
最近の増加率は顯著なる
電源は豊富となる……………九
需要増加の勢に充分の用意
受電設備と配電設備

3 京王電車の財政……………一〇
拾年間に七倍に膨脹……………一〇
財政の拡大と資産内容の良化
帳簿上の資産超過額
割安の電車建設費……………一一
一哩當り拾貳萬參千五百圓
平均建設費の半額に満たず
正味資産は株金の六割超過
収益状態の順況……………一二
敷入の半分は利益となる
好成績を擧げる所以

4 餘録……………一四
株主人員數と持株數の内譯……………一四
役員の移動と在職期間……………一五
従業員増加趨勢……………一六

5 附圖……………一六
京王線、玉南線沿道鳥瞰圖
乗客人員、貨物運賃對照圖
電燈、電力供給事業發展圖
資本關係及收支狀況早見圖
寫真(沿線の名勝と風光)數葉

京王電車の生ひ立

投資經營顧問
田鍋一二事務所 編纂

京王電気軌道株式會社は、明治四拾參年九月廿壹日、資本金壹百貳拾五萬圓(四分一拂込)を以て創立せられ、始め東京府豊多摩郡内藤新宿町三丁目四拾八番地(今の東京市四谷區新宿追分)を起點とし、八王子市千人町字追分に至る本線と、府中町より分岐して省線國分寺驛に至る支線、並に谷保村より分岐して省線立川驛に至る支線とを敷設する目的であつたが、其後四圍の状況に鑑み、特許線一部の變更を申請して聽許せられ、明治四拾五年六月拾壹日起工

大正貳年四月拾五日笹塚・調布間(延長七哩四八鎖)電車運轉を開始し、同時に新宿・笹塚間及び調布・府中間は自動車を経て連絡運輸に従ふ。

大正四年五月壹日新宿・笹塚間(延長二哩三三鎖)電車開通
大正五年六月壹日調布・多摩川原間(延長五二鎖)支線開通
同年九月壹日調布・飛田給間(延長一哩一一鎖)開通と共に砂利及一般貨物の輸送開始

同年拾月末日飛田給・府中間(延長二哩四八鎖)竣成
斯くて全線開通するや、乗客は日に月に遞増を告げて歇まず、仍て漸次復線工事を施し、拾參年四月悉く其の功を竣へ、今や全線一四哩五分、此線路延長二九哩九分六八に達したのである。

是より先、大正貳年壹月より北多摩郡府中・調布・多磨・西府の四ヶ町村に電燈の供給を開始し、次で大正五年拾月より電力の供給を開始し、營業範圍漸く多岐に亘り、業務自ら繁劇を來たすと共に資本の膨脹を促し、左記三回の増資に依り今や資本金壹千貳百萬圓を擁するに至つた。

大正八年貳月資本金壹百貳拾五萬圓増加
大正拾壹年參月資本金參百萬圓増加
大正拾四年拾月資本金六百五拾萬圓増加

大正
15. 3. 8
寄贈 (1)

創業當初の艱難と

會社再生の恩人と功勞者

顧みるに、當會社開業當初は、經濟界が不況の極點に陥りたる際であつた爲めに、第二回拂込に應ずる能はずして失權處分に附せられたもの一、五四六株(總株數貳萬五千株の内)に達し、拂込額面貳拾圓に對し、競落代金僅々壹圓に過ぎざるの有様であつた。従つて重役全員辭任を申出で、森村銀行に向つて救済を仰ぐの餘儀なきに至つたのである。處が同行頭取森村市左衛門翁(先代男爵)は快く之を引受けられ、且つ其の善後策に就て故和田豊治氏に諮られた結果、新に專務取締役として小田切忠四郎氏並に藤井諸照氏(後に取締役會長就任)を推薦し、新重役等は鋭意工事の進捗を圖つたが、資金調達の上第三回拂込を徵收するに及んで再び蹉跌を生じ、失權株式五、二七〇株に達し、競落代金は拂込額面貳拾五圓に對して漸く參圓拾五錢と云ふ悲運に際會した。

井上專務就任後面目一新

是より先、當時の取締役會長川田鷹氏は海外旅行の爲め任を辭し小田切專務亦た病氣の故を以て職を退かれたので、大正四年六月、再び和田氏の推薦に依り、藤井諸照氏取締役會長に、前富士紡商務部長にして玉川電鐵の取締役兼支配人たる井上篤太郎氏が新に專務取締役に就任されたのである。時に會社は設立後滿五年を閲し、拾期の決算を経たが、其間に於ける總收入拾四萬五千八百卅圓なるに、支出は拾八萬四千餘圓を計上した程で缺損狀態に苦吟してゐた。従つて當時會社の財政は、殆ど森村銀行に依つて賄はれ、負債は拂込株金を超過してゐたが、井上專務就任に際し、更に五拾萬圓迄の融通増加を引受けられた(五年下期末負債總額百拾貳萬圓に達した)ことは、大に多とすべき點であらう。勿論此の際には、同行支配人故諸葛小彌太氏の英斷的厚意が働いたからである。

井上專務就任後、和田相談役指導の下に、只管社務の整理と事業の刷新に力を注ぎ、纔に社運挽回の曙光を認むるに至つたので、大正五年下半年に於て、創立以來初めて五朱の株主配當を行つた。爾來經濟界の恢復と沿線各地の發展と兩々相俟つて業績彌々舉り、社運頓に隆盛を加へ、株主配當の如きも、左の如く累進を示してゐる。

創立以來株主配當率毎期對照表

五年下期	五 朱	九年上期	一 割	同 下期	一 割二分
六年上期	五 朱	同 下期(十一年)	一 割二分	十三年上期	一 割二分
同 下期	六 朱	十年上期	一 割	同 下期	一 割三分
七年上期	六 朱	同 下期	一 割一分	十四年上期	一 割三分
同 下期	七 朱	十一年上期	一 割一分	同 下期(十五年)	一 割八分
八年上期	七 朱	同 下期	一 割二分		
同 下期	八 朱	十二年上期	一 割二分		

玉南鐵道と素志の貫徹

社業の基礎確立を告げ、収益狀態亦飽和の域に達すると共に、省みて創立當初の使命を果すべく、旁々地方人士の切なる希望を容れ、乃ち別に玉南鐵道株式會社を設立して、以て東京八王子兩市間の聯絡運輸を企圖するに至つたのは、當然の事態である。

前取締役會長

藤井諸照氏

取締役

金光庸夫氏

元監査役

上原喜作氏

創立以來株主配當率毎期對照表

五年下期	五年上期	六年下期	六年上期	七年下期	七年上期	八年下期	八年上期	同下期
五	五	六	六	七	七	七	八	八
朱	朱	朱	朱	朱	朱	朱	朱	朱
九	十	十	十	十	十	十	十	十
年	年	年	年	年	年	年	年	年
上	上	上	上	上	上	上	上	上
期	期	期	期	期	期	期	期	期
(十	(十	(十	(十	(十	(十	(十	(十	(十
五	五	五	五	五	五	五	五	五
年)	年)	年)	年)	年)	年)	年)	年)	年)
一	一	一	一	一	一	一	一	一
割	割	割	割	割	割	割	割	割
二	二	二	二	二	二	二	二	二
分	分	分	分	分	分	分	分	分
同	同	同	同	同	同	同	同	同
下	下	下	下	下	下	下	下	下
期	期	期	期	期	期	期	期	期
十	十	十	十	十	十	十	十	十
三	三	三	三	三	三	三	三	三
年	年	年	年	年	年	年	年	年
上	上	上	上	上	上	上	上	上
期	期	期	期	期	期	期	期	期
(十	(十	(十	(十	(十	(十	(十	(十	(十
五	五	五	五	五	五	五	五	五
年)	年)	年)	年)	年)	年)	年)	年)	年)
一	一	一	一	一	一	一	一	一
割	割	割	割	割	割	割	割	割
二	二	二	二	二	二	二	二	二
分	分	分	分	分	分	分	分	分
同	同	同	同	同	同	同	同	同
下	下	下	下	下	下	下	下	下
期	期	期	期	期	期	期	期	期
(十	(十	(十	(十	(十	(十	(十	(十	(十
五	五	五	五	五	五	五	五	五
年)	年)	年)	年)	年)	年)	年)	年)	年)
一	一	一	一	一	一	一	一	一
割	割	割	割	割	割	割	割	割
八	八	八	八	八	八	八	八	八
分	分	分	分	分	分	分	分	分

玉南鐵道と素志の貫徹

社業の基礎確立を告げ、収益状態亦飽和の域に達すると共に、省みて創立當初の使命を果すべく、旁々地方人士の切なる希望を容れ、乃ち別に玉南鐵道株式會社を設立して、以て東京八王子兩市間の聯絡運輸を企圖するに至つたのは、當然の事態である。

會社再生の恩人と創立以來の直接功勞者

前取締役會長
藤井 諸照氏

取締役
金光庸夫氏

元監査役
上原喜作氏

取締役
工學博士
渡邊嘉一氏

元取締役會長
川田 鷹氏

前森村銀行頭取
故 男 爵
森村市左衛門翁

取締役
榛葉良男氏

取締役
山口 憲氏

相談役
植村俊平氏

元專務取締役
利光丈平氏

故相談役
和田豊治翁

監査役
上山良吉氏

監査役
村野儀右衛門氏

取締役
榎本藤次郎氏

前專務取締役
小田切忠四郎氏

專務取締役
井上篤太郎氏

監査役
井上平左衛門氏

取締役
津田興二氏

會操再坐の恩人、除立以來の直對也榮者

井上謙太郎氏
專務取締役

井上平次瀧門氏
監査役

榊田興二氏
取締役

財本頼次郎氏
取締役

小田忠四郎氏
前專務取締役

味田豊尚氏
取締役

土山貞吉氏
監査役

林理辯次瀧門氏
監査役

藤林對平氏
取締役

味光友平氏
元專務取締役

森林市次瀧門氏
社長
前森林總行頭取

榊葉貞良氏
取締役

山口憲氏
取締役

野島嘉一氏
工學博士
取締役

川田源氏
元取締役會長

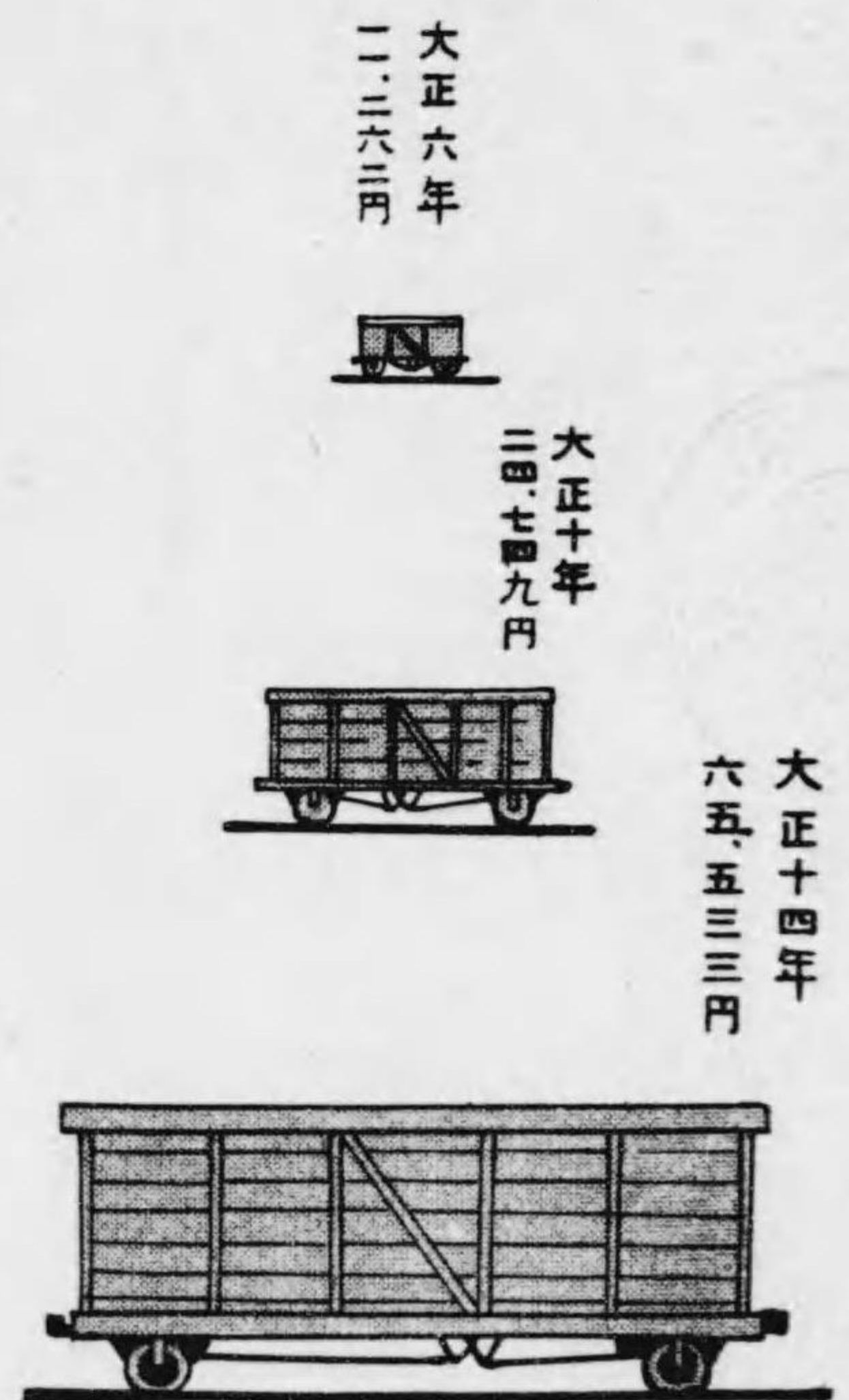
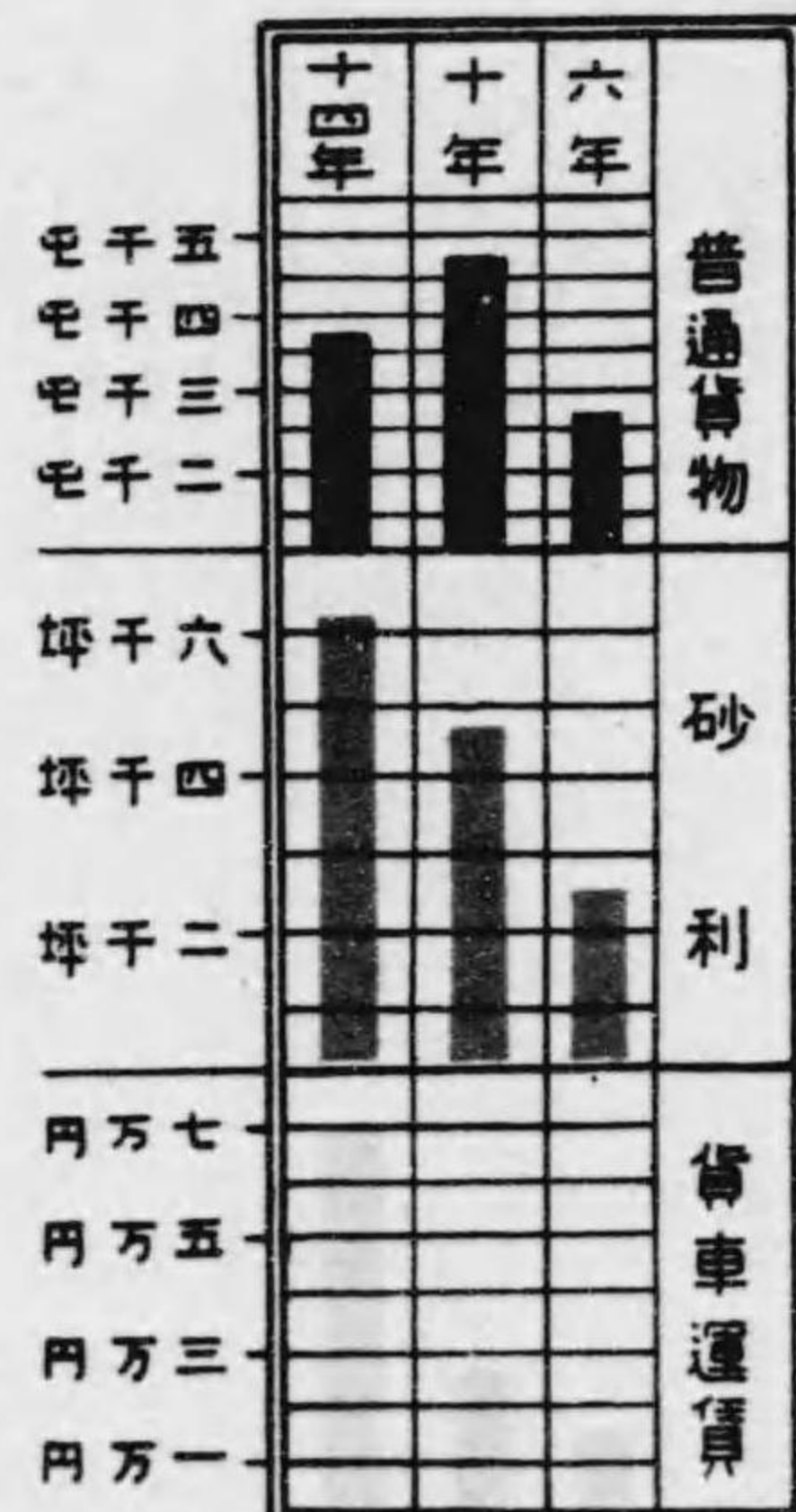
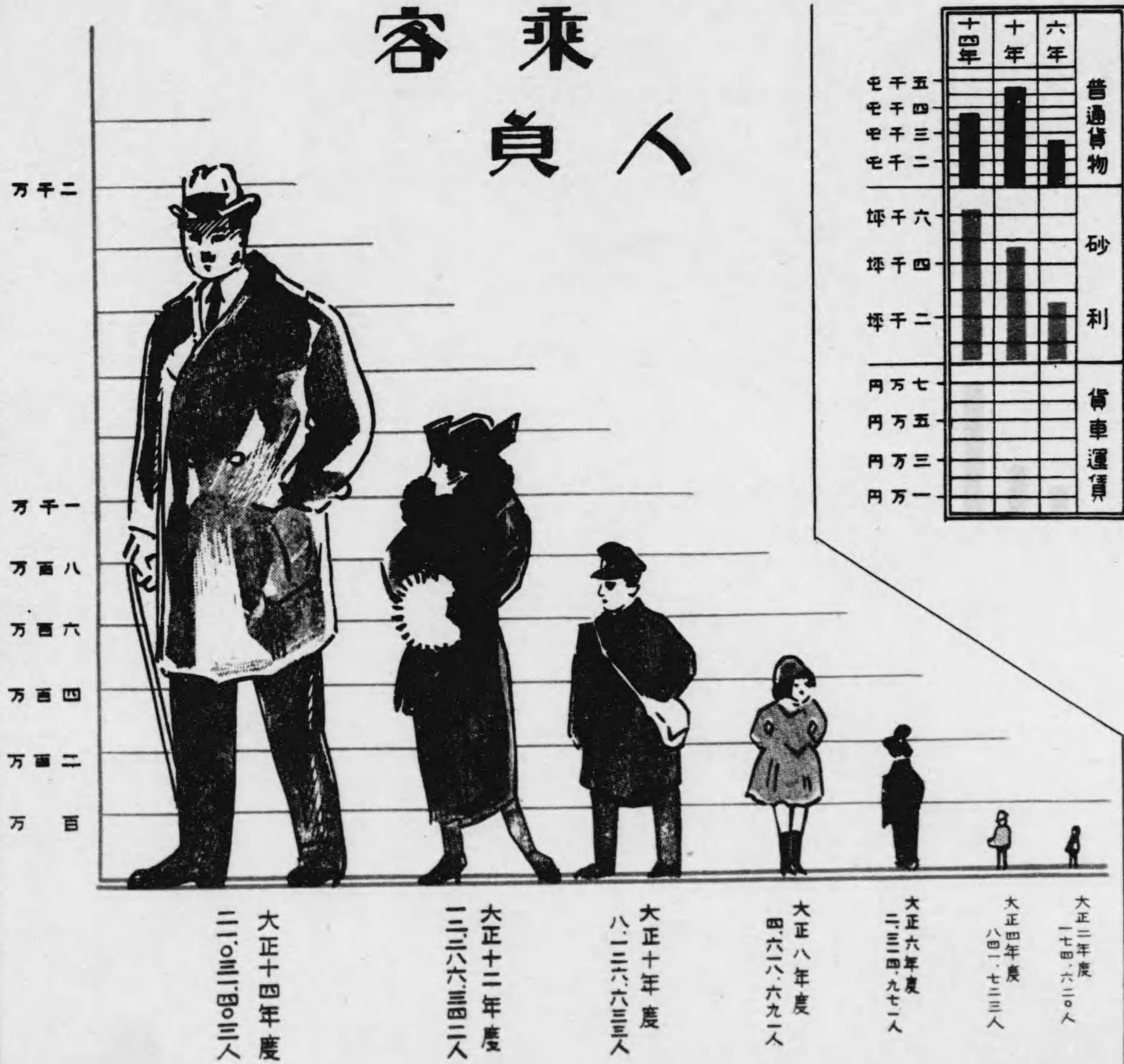
藤井龍照氏
前取締役會長

金光龍夫氏
取締役

土原喜平氏
元監査役



乗客 負人



貨運車貨 比較比入枚

玉南鐵道は、大正拾年拾月地方鐵道法に則り、京王電車の終點府中に起り、多摩川を横斷して其の南岸に沿ひ、八王子市に至る線路敷設の免許を受け、大正拾壹年七月、資本金壹百五十萬圓を以て創立（現在拂込濟）、大正拾四年參月貳拾四日を以て全線一〇哩一分の開通を告げたのである。

當會社は玉南鐵道の設立に際し、株式總數參萬株の内、四割即ち壹萬貳千株を引受け、現に姉妹會社として指導的立場に居るから、業務經營上殆ど一身同體の作用を營むことを得て相互會社の利益を増進せしめる

万千二
 万千一
 万百八
 万百六
 万百四
 万百二
 万百



大正十四年度
 二,031,403人

玉南鐵道は、大正拾年拾月地方鐵道法に則り、京王電車の終點府中に起り、多摩川を横斷して其の南岸に沿ひ、八王子市に至る線路敷設の免許を受け、大正拾壹年七月、資本金壹百五拾萬圓を以て創立（現在拂込濟）、大正拾四年參月貳拾四日を以て全線一〇哩一分の開通を告げたのである。

當會社は玉南鐵道の設立に際し、株式總數參萬株の内、四割即ち壹萬貳千株を引受け、現に姉妹會社として指導的立場に居るから、業務經營上殆ど一身同體の作用を營むことを得て相互會社の利益を増進せしめるに便宜が多い。例へば、玉南線全通と俱に、兩會社は新宿八王子間通し切符を發賣し、更に高尾自動車株式會社と協定して高尾山麓までの連絡切符を發行するなど、之れに依つて乗客の享くる利便は昔日の比にあらず、蓋し維れ當會社が素志の貫徹に忠なるの致す所に外ならぬ次第である。

尙ほ當會社は南武鐵道に投資し、他日の培養線たらむことを期してゐるが、本鐵道は省線立川驛に於て青梅鐵道と聯絡し、府中に於て玉南線又は京王線と交叉し、一方多摩川南岸に沿ふて神奈川縣川崎市に至るべき計畫の下に工を進めてゐるものである。

更に社業の充實を圖る

當會社は今や第二段の發展策を講ずると共に、更に社業の充實を企圖し、目下左記各般の施設に就て、専ら其の最善を期しつゝある。

(一)多摩川原遊園地に演藝館、浴場、プール(水泳場)、テニスコート、籠球コート等を設備し、子女の行業に興を添へること。(多摩川原遊園地諸設備は着々進捗を告げ、前期末迄に會社の支出濟建設費約貳拾萬圓に上り、美裝を凝せる平和の樂天地は完成に近づきつゝあり。)

(二)多磨停車場より分岐し、東京市營に係る多磨共葬墓地の西側を経て、省線武藏小金井驛を横斷し、小金井橋に至る延長三哩三分の支線を敷設すること。(起工準備中)

(三)新宿起點を約一丁東寄に移し、工費六拾萬圓を投じ、鐵筋混凝土四階建の停車場を新築すること(用地は買收済)

(四)笹塚・代田橋間に鐵橋 敷設して匂配を取除き、仙川・柴崎間の急匂配を六十分一に改め、金子附近の國道併用を避けて専用線路を作る等、總て旅客に不快の感と與へる虞れある個所に對し、改良工事を施すこと。

(五)新宿・調布間に於けるトロリー線の木柱を鐵柱及び鐵塔に取替へ、鐵塔には笹塚・柴崎・府中各變電所間一哩二分を連絡する二萬二千ヴォルト二回線の送電線を添架し、以て耐久と能率の増進を圖る事(府中調布間は變電所)

(六) 叙上の軌道改良工事完成の曉に於ては、全線を通じて走行時間約拾分を短縮し得ること。右の諸計畫を遂行し得たる後に於て、當會社は更に劃期的大飛躍を企てゝゐる。其の概要は次の通り。

高架線計畫と電力増加

(イ)新宿・下高井戸間現在の路面電車を専ら近距離沿道居住者の用に供し、其の區間を限り三呎六吋軌幅の高架線を設け、玉南と連絡して東京・八王子間直通急行に便ならしめること。即ち現在よりも約廿二分を短縮し、新宿・府中間を四十分、府中・八王子間を三十分にして到達し得るやうになる。

(ロ)電燈電力の需要増加の趨勢に順應すべく、十四年二月より新に東電から電力貳千キロの購入を約し、之が爲めに府中に變電所を建設したが、更に既設變電所の改良擴張を行ひ、電鐵用として笹塚には六百キロ三臺を、柴崎には五百キロ二臺を据付け、今後數年間の供給に不自由ならしめらるゝことにした。



大正十四年度
Tomlinson

万二千
万一千
万八百
万六百
万四百
万二百
万

玉南鐵道は、大正拾年拾月地方鐵道法に則り、京王電車の終點府中に起り、多摩川を横斷して其の南岸に沿ひ、八王子市に至る線路敷設の免許を受け、大正拾壹年七月、資本金壹百五十萬圓を以て創立（現在拂込済）、大正拾四年參月貳拾四日を以て全線一〇哩一分の開通を告げたのである。

當會社は玉南鐵道の設立に際し、株式總數參萬株の内、四割即ち壹萬貳千株を引受け、現に姉妹會社として指導的立場に居るから、業務經營上殆ど一身同體の作用を營むことを得て相互會社の利益を増進せしめるに便宜が多い。例へば、玉南線全通と俱に、兩會社は新宿八王子間通し切符を發賣し、更に高尾自動車株式會社と協定して高尾山麓までの連絡切符を發行するなど、之れに依つて乗客の享くる利便は昔日の比にあらず、蓋し維れ當會社が素志の貫徹に忠なるの致す所に外ならぬ次第である。

尙ほ當會社は南武鐵道に投資し、他日の培養線たらむことを期してゐるが、本鐵道は省線立川驛に於て青梅鐵道と聯絡し、府中に於て玉南線又は京王線と交叉し、一方多摩川南岸に沿ふて神奈川縣川崎市に至るべき計畫の下に工を進めてゐるものである。

更に社業の充實を圖る

當會社は今や第二段の發展策を講ずると共に、更に社業の充實を企圖し、目下左記各般の施設に就て、専ら其の最善を期しつゝある。

(一)多摩川原遊園地に演藝館、浴場、プール(水泳場)、テニスコート、籠球コート等を設備し、子女の行樂に興を添へること。(多摩川原遊園地諸設備は着々進捗を告げ、前期末迄に會社の支出濟建設費約貳拾萬圓に上り、美裝を凝せる平和の樂天地は完成に近づきつゝあり。)

(二)多摩停車場より分岐し、東京市營に係る多摩共葬墓地の西側を経て、省線武藏小金井驛を横斷し、小金井橋に至る延長三哩三分の支線を敷設すること。(起工準備中)

(三)新宿起點を約一丁東寄に移し、工費六拾萬圓を投じ、鐵筋混凝土四階建の停車場を新築すること(用地は買收済)。

(四)笹塚・代田橋間に鐵橋 敷設して匂配を去除き、仙川・柴崎間の急匂配を六十分一に改め、金子附近の國道併用を避けて専用線路を作る等、總て旅客に不快の感と與へる虞れある個所に對し、改良工事を施すこと。

(五)新宿・調布間に於けるトロリー線の木柱を鐵柱及び鐵塔に取替へ、鐵塔には笹塚・柴崎・府中各變電所間一哩二分を連絡する二萬二千ヴォルト二回線の送電線を添架し、以て耐久と能率の増進を圖る事(府中調布間は竣功)

(六) 叙上の軌道改良工事完成の曉に於ては、全線を通じて走行時間約拾分を短縮し得ること。右の諸計畫を遂行し得たる後に於て、當會社は更に劃期的大飛躍を企てゝゐる。其の概要は次の通り。

高架線計畫と電力増加

(イ)新宿・下高井戸間現在の路面電車を専ら近距離沿道居住者の用に供し、其の區間を限り三呎六吋軌幅の高架線を設け、玉南と連絡して東京・八王子間直通急行に便ならしめること。即ち現在よりも約廿二分を短縮し、新宿・府中間を四十分、府中・八王子間を三十分にして到達し得るやうになる。

(ロ)電燈電刀の需要増加の趨勢に順應すべく、十四年二月より新に東電から電力貳千キロの購入を約し、之が爲めに府中に變電所を建設したが、更に既設變電所の改良擴張を行ひ、電鐵用として笹塚には六百キロ三臺を、柴崎には五百キロ二臺を据付け、今後數年間の供給に不自由ならしめることにした。



乗客二千百万人

毎年平均二割以上の増加率

大正拾四年度に於ける京王電車の乗客数は、上期に壹千參拾貳萬七千餘人、下期に壹千七拾萬餘人を算したため、合計貳千壹百萬人を凌駕し、之が乗車賃金は無慮壹百拾九萬圓に達したのである。試みに之を以て四年前の大正拾年度に較ぶれば壹千參百萬人即ち拾六割方の増加に當り、更に拾年前の大正四年度に較ぶれば壹千九百萬人の増加で殆き廿五倍である。溯つて開業當初の大正二年度に於て拾七萬四千六百人の乗客数を示し、此乗車賃金壹萬六千圓に過ぎざりしことを回想すれば、轉々隔世の感を禁じ得ないであらう。(圖表参照)

客車營業成績每期對照表

期別	乗客數	乗車賃金	運轉哩數	一車乗客數	一車乗車賃金	車輛臺數
大正二年前上期	三三、四三三	三、六一・九二	二五、一八六・二	一・五	一四・三	六
大正二年前下期	一三七、二〇七	一二、五二・九八	一〇三、七八九・六	一・三	一三・二	六
大正三年前上期	一四五、九四三	一三、七五・三三	九三、四六・八	一・六	一三・六	六
大正三年前下期	一〇五、一〇二	一八、六九・八一	一〇四、九三・二	一・九	一七・九	六
大正四年前上期	二二七、〇七〇	三三、一五・四九	二二七、四六・七	二・三	一七・四	六
大正四年前下期	四四四、六五三	三五、〇七・三三	一七〇、八二・五	三・二	二〇・六	八
大正五年前上期	六〇七、三三八	三五、七三・三〇	一七六、七五・六	三・四	二〇・一	三
大正五年前下期	八三三、一九九	四七、九六・七五	二〇、六六・四	三・六	二〇・八	四
大正六年前上期	一、〇三三、三三八	五八、〇八・六九	二六、五七・八	三・八	二二・一	八
大正六年前下期	一、二九二、七三三	六七、二六・二二	二八、九八・〇	四・〇	二二・一	〇
大正七年前上期	一、四四二、三九〇	七三、五九・一五	三二、〇、九八・二	四・七	二二・七	〇
大正七年前下期	一、七七、九三三	九三、五〇・四四	三三、〇三・八	五・二	二七・九	〇
大正八年前上期	二、〇五八、八七七	一〇七、九一・一	三三、〇三・八	六・四	三三・三	〇
大正八年前下期	二、五九九、八四四	一三六、七二・〇九	三五、四、九七・一	六・五	三三・六	〇
大正九年前上期	二、七九、三〇二	一七、八六・三二	三七、三三・〇	七・四	三三・七	〇
大正九年前下期	三、二四〇、四四六	二〇三、〇八・九八	四三、七〇・九	七・六	三三・〇	〇
大正十年前上期	三、六八、二一九	二三、二〇・六九	四〇、五、九三・一	九・一	三五・〇	〇
大正十年前下期	四、四三、五一四	二六、二、七三・四	四六、二、五五・七	九・六	三七・〇	〇

大正十一年上期	四、八六〇、七八四	二七、九、八一・〇八	四七、九、六四・〇	一〇・一	三六・〇	一八
大正十一年下期	五、六五一、八三七	三三、三、〇六・六八	六二、七、四一・六	九・二	三六・〇	一八
大正十二年上期	五、八〇七、六三〇	三三、六、二九・九七	五八、一、〇四・二	一〇・〇	三七・九	一八
大正十二年下期	六、四七九、七二二	三七、八、二〇・七〇	五〇、〇、〇〇・七	一一・二	七一・三	二
大正十三年上期	八、四三三、九八七	四七、〇、五三・三四	五四、七、四九・一	一五・四	八六・〇	二

大正八年上期	二、〇五八、八三七	一〇七、九二一、五六六	三三四、〇三三、〇八	六、〇四	五三三、〇三三	一八	四	三三
大正八年下期	二、五九八、八三四	一三六、五七二、〇九	三九九、九七〇、一	六、〇五	五三四、〇三三	一八	四	三三
大正九年上期	二、七九七、三〇六	一七七、八六三、二二	三七三、〇三三、〇	七、〇四	四七六、〇	一八	四	三三
大正九年下期	三、二〇〇、四四六	二〇三、〇五八、九八	四二七、〇二九、〇	七、〇六	四八〇、〇	一八	四	三三
大正十年上期	三、六八八、二一九	二三四、一三〇、六九	四〇五、九三八、一	九、〇一	五三〇、〇	一八	四	三三
大正十年下期	四、四三八、五四四	二六二、七三三、四四五	四六二、五六五、七	九、〇六	五七〇、〇	一八	四	三三

大正十一年上期	四、八〇〇、七八四	二七九、八二一、〇八	四七九、六九四、〇	一〇、〇一	五八〇、〇	一八	四	三三
大正十一年下期	五、六五一、八七	三三三、〇六六、八	六二七、四二四、六	九、〇二	六六〇、〇	一八	四	三三
大正十二年上期	五、八〇七、六三〇	三三六、二九九、九七	五八一、九四四、二	一〇、〇〇	五七〇、九	一八	四	三三
大正十二年下期	六、四七九、七二二	三七八、二〇〇、七〇	五三〇、〇一〇、七	一〇、〇二	七二〇、〇	一八	四	三三
大正十三年上期	八、四三三、九七	四七〇、五九三、二四	五七〇、四九九、一	一五、〇四	八六〇、〇	二	三〇	三三
大正十三年下期	九、八〇八、五三四	五五四、六七五、三六	六七五、八四一、九	一四、〇五	八二一、	二	三〇	三三
大正十四年上期	一〇、三二七、八三三	五七九、五八〇、九	七九五、〇六七、九	一三、〇〇	七三九、	二	三〇	三三
大正十四年下期	一〇、七三三、八八〇	六一〇、三三三、三三	一、〇一九、八六八、四	一〇、〇五	五九〇、九	二	三〇	三三

五年後には五千二百萬人以上

最近の業績に基けば、極めて内輪に見積るも尙ほ年々一割づゝの自然増加を期待して差支へないやうである。然らば今後五年を経過し、大正拾九年度を迎へたならば、恐らく五千二百萬人以上に達すべきは疑ふの餘地なく、同時に乗車賃金も之れに比例して参百萬圓臺に上るであらう。復た熾なるかなと謂ふべきである。

一車一哩當りの乗客数と賃金

翻つて、一車一哩當り乗客数の趨勢を査するに、震災前一〇人止りであつたものが、其後急に上騰して十三年上期には一五・四人となつてゐる。是れは抑も何に基因するかと言へば、震災の爲めに多數の車輛を喪失した横浜市電氣局に對し、當會社は四輪車拾六臺を譲渡して其の急に赴いた結果、一時乗客密度が濃厚になつた次第である。其の證據には同期下期に於て新造ボギー車八臺を補充するや、濃度は幾分緩和を萌して一四・五人となり、次の拾四年上期に更に六臺を殖やしたので一三人に降り、下期に入つて操車状態益々頹況となるに及び、一〇・五人と略ほ震災前の舊狀に復したわけである。

次に一車一哩當り乗車賃金を査するに、之も前段と同様の歩調を辿り、拾参年上期の八六錢を軸として次第に下降し、拾四年下期には五九・九錢と震災前に稍寄せしてゐる。畢竟するに新臺増加に依り車輛使、乗客混雑の弊を救はれたわけで、震災直後の過渡的現象は最早や過去のことゝに屬するに至つた。而も現に製造中の六臺の新ボギー車が就業すれば、乗客の増加率に順應して克く混雑を防ぎつゝ、輸送能率を發揮し得る筈である。而して今後も引續き毎年六臺乃至八臺の新造車を増設して行く豫定になつてゐる。

因に當會社線の車輛数が震災前に比し減少の觀あるも、四輪車ミホギー車は擔載力に於て一に對する二・五以上の優勢あれば、震災前の四輪車一八臺・ボギー車三〇臺は、現今のボギー車の場合の三七臺にも匹敵せぬわけで、近く新造車を加へボギー車五〇臺、四輪車二臺を備ふるの曉きは、震災前に比し優に四割の乗客輸送力を増すことになるのである。

多摩川砂利の搬出
貨物運賃も年に六七萬圓

當會社が貨車の運轉を始めたのは、調布支線開通の大正五年拾月以降で、貨物の主たるものは多摩川沿岸に無盡蔵の稱ある砂利である。固より乗客運輸の閑を以て營む副業の一たるに過ぎぬ有様ではあるが、拾四年度の運賃収入六萬五千五百餘圓、震災の拾貳年度には七萬圓を超へた程で、今では主動車八臺と附隨車二〇臺を備ふるに至つたから、景氣一たび躍動するに逢へば、貨車營業より年額拾萬圓の収益を擧げ得るの望みがある。左に毎期の成績對照表を示す。

貨物營業成績每期對照表

期別	貨物數量		運賃	一日平均運賃	車輛數	
	噸	量			主働車	附隨車
大正五年下期	九七五・八八七	七三三	六、二五七・九四〇	五四・一九六	二	八
大正六年上期	八五三・八八三	六一七	四、六八〇・九〇	二五・四二九	二	八
大正六年下期	一、〇八一・六八七	九〇〇	六、六三四・二〇	三六・二五二	四	八
大正七年上期	一、〇八一・〇〇九	八七四	六、八七二・四六五	三七・七六一	四	八
大正七年下期	一、六二二・七六九	一、三七七	七、四〇六・七五五	四〇・四七四	四	八
大正八年上期	一、四五四・〇九一	二、四九六	七、四三三・六九五	四〇・七九〇	四	八
大正八年下期	一、八四〇・四六六	一、七七二	九、九四四・〇〇	五四・三三九	四	八
大正九年上期	一、四〇八・五三二	一、九六六	一五、九七六・三三〇	八七・三〇〇	四	八
大正九年下期	一、七六二・〇四〇	一、三九五	一、一〇三・三三〇	六〇・一八〇	四	八
大正十年上期	一、六七八・〇七二	一、一七六	一三、六四一・一〇〇	七四・九五〇	六	八
大正十年下期	一、九二二・五九一	一、三四一	一一、〇八八・三九〇	六〇・七〇〇	六	八
大正十一年上期	二、四一九・五三〇	七八五	一八、二四五・〇九〇	一〇〇・二四八	六	八
大正十一年下期	一、九八七・七二一	五〇〇	三四、八〇・八三〇	一八七・八七〇	六	八
大正十二年上期	一、六八一・四九〇	七〇五	四二、七四一・四一〇	二三四・八四〇	六	八
大正十二年下期	一、四九一・六六六	一、三四〇	二八、四七八・三二〇	一五五・六二九	六	八
大正十三年上期	二、五五五・四九九	一、七九七	三三、六九一・三二〇	一七八・六四一	六	八
大正十三年下期	二、一五五・〇七	一、三〇〇	三〇、一六六・〇九〇	一六四・八四二	八	八
大正十四年上期	二、〇六六・五七	七二〇	三三、九〇九・七四〇	一八〇・八三三	八	八
大正十四年下期	二、〇二八・五七五	六九〇	三三、六三三・四三〇	一七八・三三七	八	八

帝都復興と砂利需要激増の對策

當會社の砂利輸送量は、十二年上期の三、六三坪が最高記録で、兩半期を通じての全年分に於ては十一年度の五、六二坪がレコードとなつてゐる。其後十三年度に於ては五、二九坪五合、十四年度に於ては五、四〇五坪五合と遞下したが、是れは帝都復興事業の遷延せる事情に基くもので、寧ろ自然の趨勢を裏切つてゐるものであらう。

今や不景氣も漸く大底入の域に近づき、一方區劃整理の進捗に伴ひ、帝都復興に關する施設も、官業たると民營たるを問はず、一齊に促進されむとするの機運に際會してゐるから、道路橋梁家屋建築の諸工事に對するコンクリート材料としての砂利需要は、早晚大に喚起さるべく、従つて當會社の砂利運輸業務も當然繁忙を來すべき筈である。そこで當會社は、十三年下期以來、從來の主働車六臺を八臺に、附隨車一四臺を二〇臺に夫れ／＼増加して、貨物の輻輳の場合に對する用意を整へてゐる。故に將來砂利輸送量が現在に比し倍加するも、其輸送に苦しむことなき見込である。

砂利以外の一般貨物は、十三年度に於て斤扱約五百萬斤、噸扱三千噸を算したが、十四年度に於ては却つて兩者を通じて幾分の減少を示してゐる。併し貨車運輸に於ては砂利が主體であるから、一般貨物の増減は總收入に對して影響する所は至つて輕微に過ぎないのである。



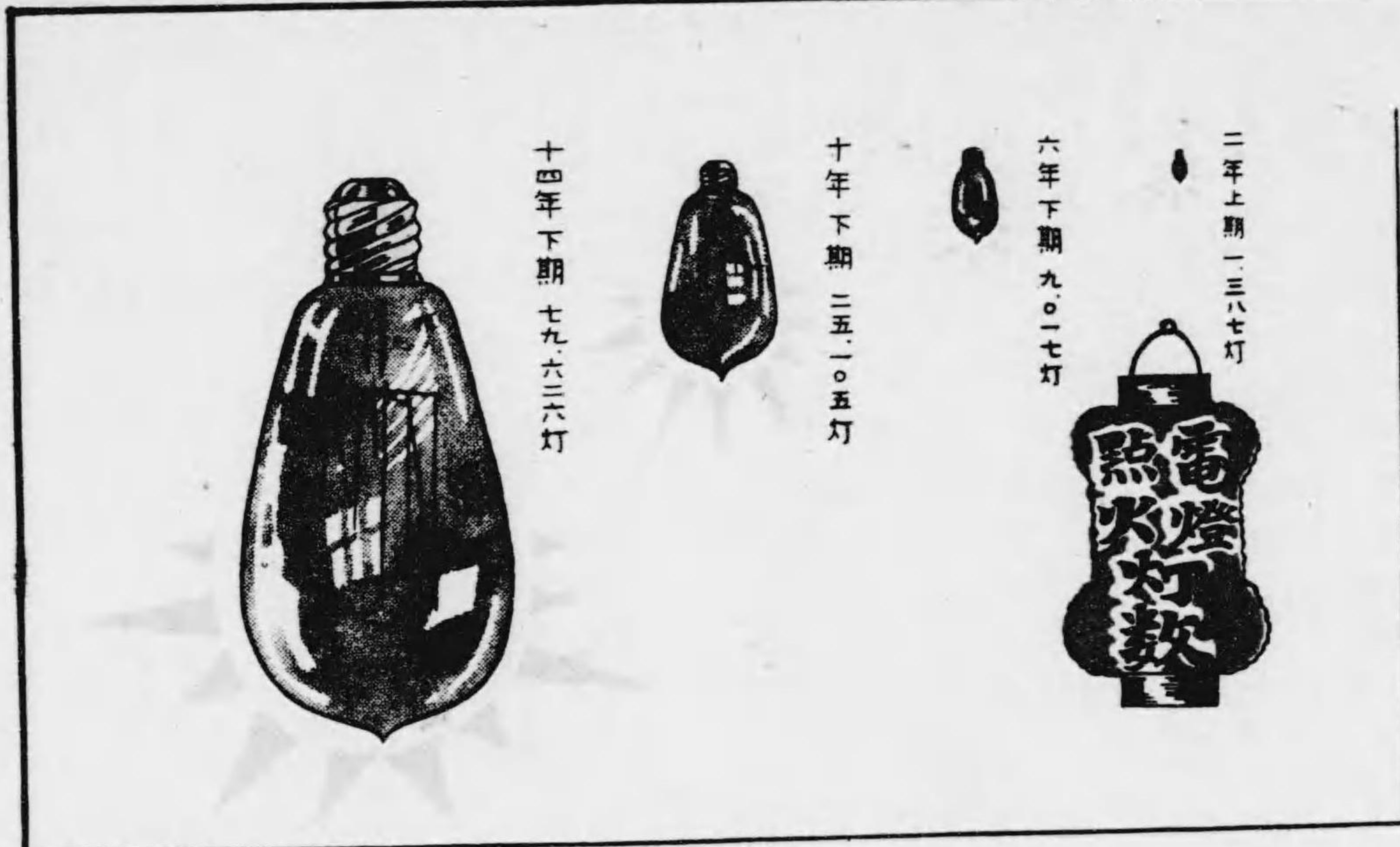
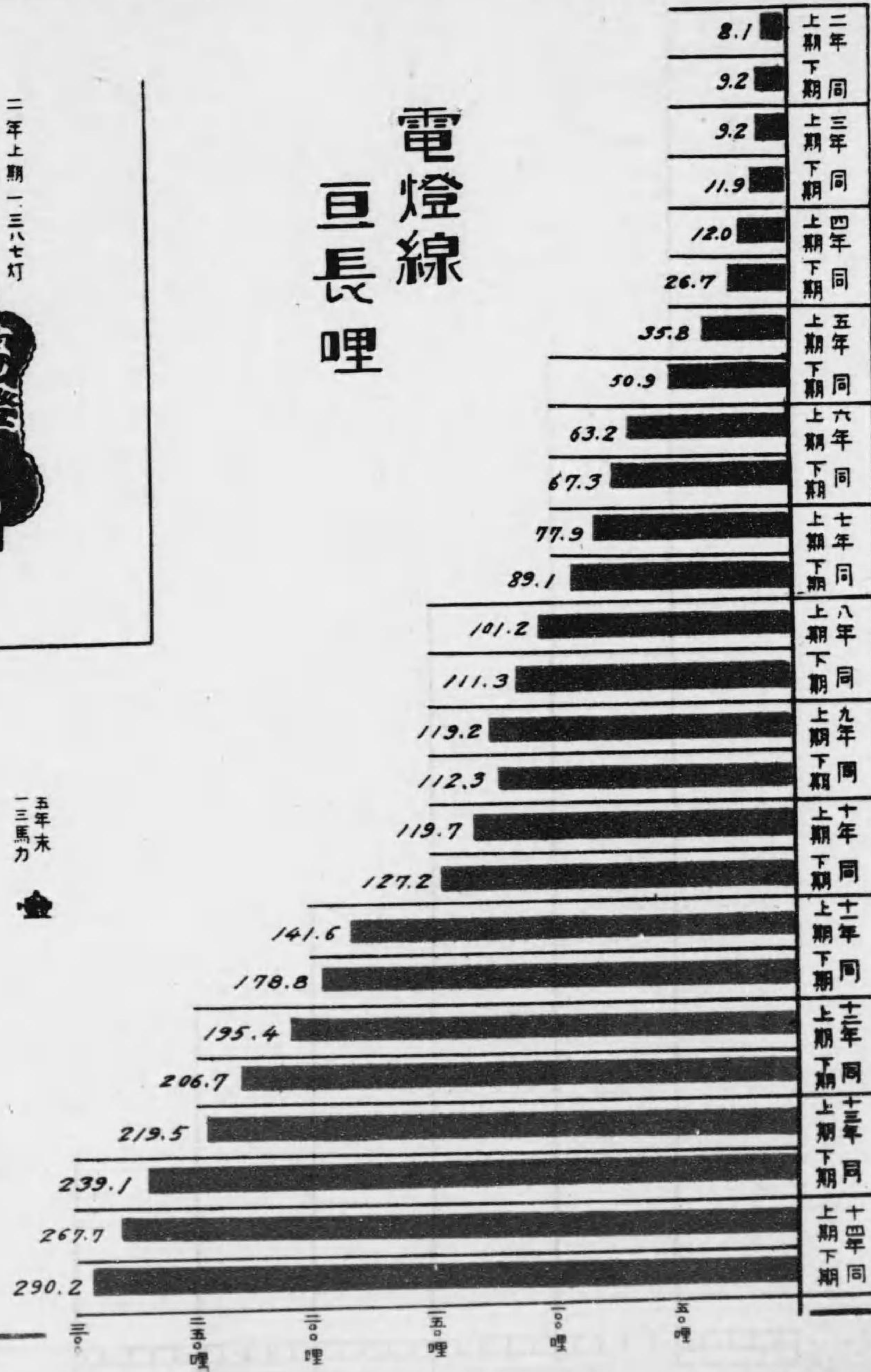
場車停宿新車電王京
圖取見成落築建



二〇臺に夫れ〳〵増加して、貨物の輻輳の場合に對する用意を整へてゐる。故に將來砂利輸送量が現在に比し倍加するも、其輸送に苦しむことなき見込である。

砂利以外の一般貨物は、十三年度に於て斤扱約五百萬斤、噸扱三千噸を算したが、十四年度に於ては却つて兩者を通じて幾分の減少を示してゐる。併し貨車運輸に於ては砂利が主體であるから、一般貨物の増減は總收入に對して影響する所は至つて輕微に過ぎないのである。

電燈線 亘長哩



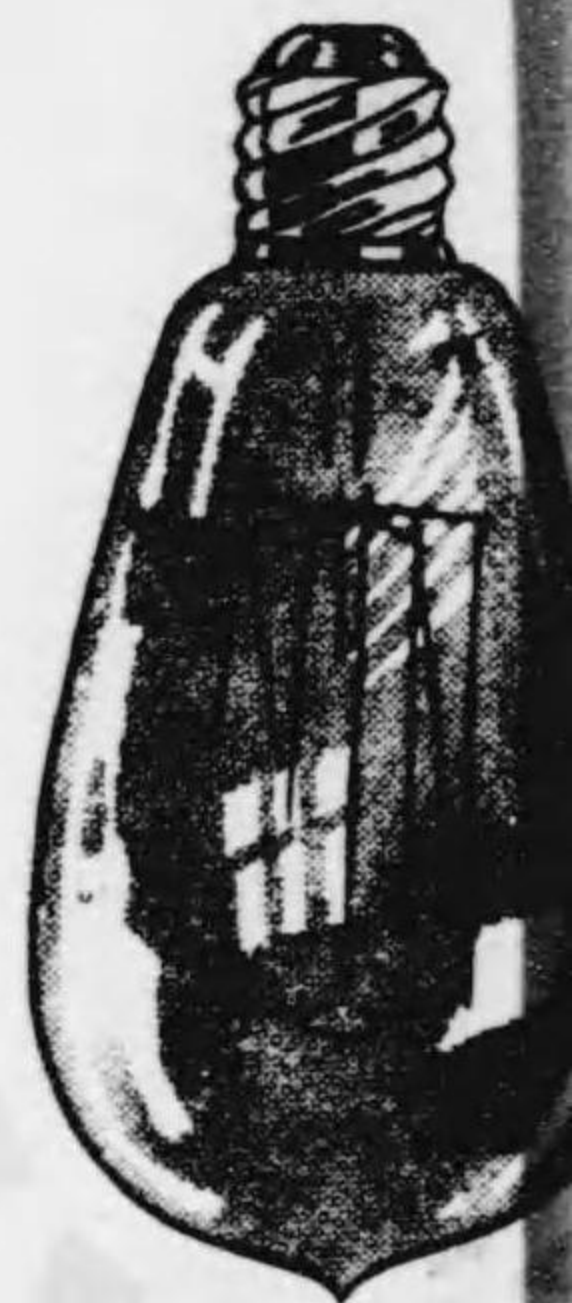
電氣動力運轉馬力数



點火電燈八萬燈

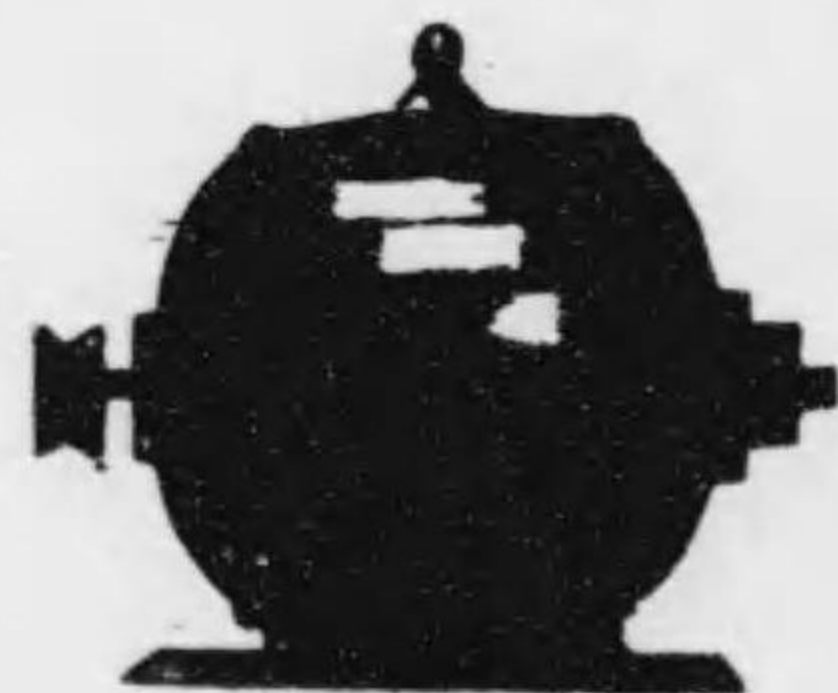
五年後には卅萬燈を突破せむ

電燈は最初調布町・府中町・多磨村・西府村の四ヶ町村に對し、大正二年一月より點火供給を開始したもので、開業第一年末なる大正二年下期には漸く一、八六三燈を算するに過ぎず、大正四年六月井上專務就任後勿



運轉馬力数

十四年末
三〇七二馬力



點火電燈八萬燈

五年後には卅萬燈を突破せむ

電燈は最初調布町・府中町・多磨村・西府村の四ヶ町村に對し、大正二年一月より點火供給を開始したもので、開業第一年末なる大正二年下期には漸く一、八六三燈を算するに過ぎず、大正四年六月井上專務就任後勿々供給區域を擴張したので、同年末には三、六五三燈に上り、爾來急進的に供給燈數を増加し、大正九年上期末には二萬燈、十二年上期末には四萬燈、十四年下期末には八萬燈と夫れ々々倍加の速度を印してゐる。供給先と供給燈數増加の迹を表示すれば次の通り。

電燈營業成績每期對照表

期別	供給區域	點火燈數	期別	供給區域	點火燈數
二年上期	四ヶ町村	一、三六七	六年下期	三ヶ町村	二九、六三七
二年下期	四ヶ町村	一、八六三	七年上期	三ヶ町村	三三、〇九〇
三年上期	四ヶ町村	二、〇三九	七年下期	三ヶ町村	三六、六七
三年下期	五ヶ町村	二、三三一	八年上期	三ヶ町村	三九、〇六五
四年上期	五ヶ町村	二、三三三	八年下期	三ヶ町村	四一、二六
四年下期	五ヶ町村	三、六五三	九年上期	三ヶ町村	四三、七〇
五年上期	三ヶ町村	五、五〇六	九年下期	三ヶ町村	四六、四二
五年下期	三ヶ町村	七、〇三三	十年上期	三ヶ町村	四九、二二
六年上期	三ヶ町村	八、五〇八	十年下期	三ヶ町村	五二、〇五

十四年下期末の現計に據れば、武藏野村の九千九百燈、代々幡町の九千三百燈の如く、一町村にして萬に垂んとするもあり、次で松澤村・立川町・世田ヶ谷町・府中町の如きは五六千燈を算し、和田堀内村・調布町は四千燈に届きかけてゐる。將來國分寺・小金井・谷保・稲田・高井戸の各村の發展は恐らく顯著なるものあるべき見込であるから、從來の速度に比例し、二年半若くは三年毎に倍加するに於ては、五年後の大正十九年末には恐らく參拾萬燈を突破するであらう。因に町村別點火燈數を表示すれば次の通り。(十四年下期末現在)

電燈供給先町村別點火燈數

調布町	三、六六九	立川町	五、八六六	松澤村	六、三三二	武藏野村	九、九〇三	世田ヶ谷町	五、三三六
多磨村	一、五六一	小平村	一、四〇〇	和田堀内村	三、八四九	砂川村	一、九七一	稻城村	六、六三
府中町	四、八七四	田無村	一、二五〇	高井戸村	一、六八八	三鷹村	二、三三八	生田村	二、六七
西府村	三、五五五	保谷村	一、七七	千歳村	二、五五五	代々幡町	九、六五五	稲田村	一、八五三
國分寺村	二、三〇〇	中神村	一、九五五	神代村	一、三四四	大泉村	一、二九四	狛江村	七、七六
谷保村	三、三三三	拜島村	六、九三	小金井村	一、五九九	砧村	二、〇〇一	多磨村	一、八〇

電燈供給區域の擴大と、點火燈數の激増と、兩々相俟つて電燈線路は年毎に延長され、最初八哩一分に過ぎざりしものが、大正五年末には五〇哩九分となり、八年上期末には一〇〇哩を越へ、十二年下期には二〇〇哩を突破し、今や二九〇哩二分を算するに至つた。

電燈線路亘長每期對照表

期別	擴張哩數	期末亘長哩數	期別	擴張哩數	期末亘長哩數	期別	擴張哩數	期末亘長哩數
二年上期	0	8.2	六年下期	4.1	67.3	十一年上期	14.4	111.6
二年下期	1.1	9.3	七年上期	10.6	77.9	十一年下期	17.1	128.7
三年上期	0	9.3	七年下期	11.3	89.2	十二年上期	16.7	145.4
三年下期	2.7	11.9	八年上期	11.1	101.3	十二年下期	11.3	156.7
四年上期	0.1	12.0	八年下期	10.1	111.3	十三年上期	11.3	168.0
四年下期	1.7	13.7	九年上期	7.9	119.2	十三年下期	19.6	187.6
五年上期	9.2	22.8	九年下期	21.1	140.3	十四年上期	26.6	214.2
五年下期	15.1	37.9	十年上期	7.4	147.7	十四年下期	33.5	247.7
六年上期	23.3	61.2	十年下期	7.5	155.2			280.2

供給動力二千餘馬力

最近の増加率は顯著となる

當會社が沿道各町村に向つて動力の供給を開始したのは大正五年拾月以降に屬し、年處を経ること漸く九ヶ年餘に過ぎず、従つて其の業績は未だ誇るべき程度には達してゐないが、

最初の三年間(大正五年下期乃至八年下期)に一三馬力より四八三・七馬力に……約三拾七倍

次の三年間(八年下期乃至十一年下期)四八三・七馬力より七〇二馬力に……四割五分増加

次の三年間(十一年下期乃至十四年下期)七〇二馬力より二、〇七二馬力に……約三倍

右の如く、兎に角二千馬力まで漕附けて來た。(此内には澁谷水道に對する貯水地揚水ポンプ動力の供給を含む)。即ち三年前に比すれば三倍に近く、六年前に比すれば四倍三分に當り、量に於ては驚くに足らぬけれども、其増加率に至つては注目し値するであらう。

左に十四年下期末に於ける町村別供給馬力數を表示する。

動力供給先町村別運轉馬力數					
代々幡町	三三三馬力	千歲村	四三三馬力	府中町	一一三馬力
拜島村	二九〇馬力	多摩村	六三〇馬力	世田ヶ谷町	三三〇馬力
砧村	四八三馬力	西府村	一〇〇〇馬力	小倉井村	七〇〇馬力
田無町	九〇〇馬力	松澤村	九九七馬力	神代村	四三〇馬力
谷保村	一〇〇〇馬力	保谷村	三三〇馬力	大泉村	二七〇馬力
和田堀内村	一七〇〇馬力	調布町	六三〇馬力	立川町	一三九馬力
武藏野村	一六六〇馬力	高井戸村	六〇〇馬力	多磨村	六八〇馬力
中神村	三三〇〇馬力	三鷹村	七〇〇馬力	計	二、〇七二馬力

電源は豊富となる

需要増加の勢に對し充分の用意

電車に、電燈に、動力に、需要激増の趨勢に鑑み、東電より新に貳千キロ受電のことは冒頭にも述べた通りであるが、是れに依つて當會社の電源は莫算參千參百キロに達する。猶ほ府中變電所に於て更に貳千八百

和 田 堀 内 村	1,200	調 布 町	600	大 泉 村	1,500
武 藏 野 村	1,600	高 井 戸 村	600	立 川 町	1,500
中 神 村	1,100	三 鷹 村	700	多 磨 村	600
計	11,000	計	2,700	計	11,000

電源は豊富となる

需要増加の勢に對し充分の用意

電車に、電燈に、動力に、需要激増の趨勢に鑑み、東電より新に貳千キロ受電のことは冒頭にも述べた通りであるが、是れに依つて當會社の電源は累算參千參百キロに達する。猶ほ府中變電所に於て更に貳千八百キロまでを増加し得べき受電設備の餘裕があるから、玆許數年間に於ける需要の増加に對しては供給上事缺く虞れはない筈である。

當會社の電力は、始め府中に出力五〇〇キロの瓦斯力發電所を設けて専ら電燈用に充て電車運轉用動力は東京電燈より三〇〇キロを購入して營業を開始したのであるが、後に玉川電氣鐵道より三〇〇キロ受電と同時に府中發電所を廢止(大正四年十二月末)して了つた。其後の補給は總て東京電燈に仰ぎ、現に同社淀橋變電所より二〇〇キロ、同社府中變電所より二〇〇キロを受電しつゝある次第である。這般の徑路を示すことは、當會社業務の發展の迹を偲ぶに好き由緒と思はれるので、左に一覽表を掲げる。

電力給源の膨脹と業務發展狀況

期 別	給源電力量 キロ	電車		貨車		點火電燈數 灯	供給動力數 馬力
		四輪車	ホギー車	主働車	附隨車		
二年下期	一七五	六	〇	〇	〇	一、八六三	〇
四年下期	二〇五	八	〇	〇	〇	三、六五三	〇
六年下期	三〇〇	一八	〇	四	八	九、〇一七	七六
八年下期	五〇〇	一八	四	四	八	一八、一九八	四八三・七
一〇年下期	八〇〇	一八	一六	六	一四	二五、一〇五	六四八・五
二年下期	一、〇〇〇	二	三〇	六	一四	四二、五一二	一、〇〇四
四年下期	一、〇〇〇	二	四二	八	二〇	七九、六二六	二、〇七二

即ち電力の給源は最初の二五キロより約拾九倍大の三、三〇〇キロに達したわけであるが、拾貳年下期と拾四年下期との業務膨脹の比例を査すれば、電車及び貨車は約四割増、電燈及び動力は孰れも殆ど倍加を示している。ではあるが電力給源は一躍三倍三分に増大したから、適かに需要の實際に超越してゐることが明瞭であらう。換言すれば、現狀に於ては精々三、〇〇〇キロ内外の電力があれば足りるわけであるけれども、電車乗客は年々二割以上(車輛は六臺、又は八臺宛)、電燈並に動力の供給數は四割内外の増加率を以て進む有様なると、夫れに近く多摩川原遊園地の竣成を控へ、且つ多磨墓地經由小金井支線を起工する筈であるから、今日でこそ電源は潤澤に過ぐるの觀があるものゝ、一兩年を出でずして再び受電量の増加を必要とするに至るであらう。

受電設備と配電能力

因に當會社變電所の現狀は次の通りである。

笹塚變電所 大正二年四月七日使用開始、電車運轉用六〇〇キロ三臺計一、八〇〇キロ、電氣供給用三、五五〇キロ
 調布變電所 大正五年五月卅一日使用開始、十四年八月烏山變電所に移轉と共に廢止
 府中變電所 大正十四年二月十四日使用開始、電車運轉用一、〇〇〇キロ、電氣供給用二、二五〇キロ
 烏山變電所 同年八月十日使用開始、電車運轉用三五〇キロ、但し柴崎變電所竣工と同時に廢止の筈
 柴崎變電所 大正十五年五月末日竣工の豫定、電車運轉用一、〇〇〇キロ

即ち笹塚・府中・柴崎三變電所を通じて電車運轉用三、八〇〇キロ、電氣供給用五、八〇〇キロの配電能力を有するわけ、一方受電設備は六、一〇〇キロ(現在三、三〇〇キロ)であるから擴張の餘地を充分に剩してゐることが知れる。



拾年間に七倍に膨脹

財政の尨大と資産内容の良化

當會社は創立以來三回の増資を行ひ、最初壹百廿五萬圓であつた資本金は今や拾倍の壹千貳百萬圓となり、同時に各勘定科目は著しく尨大を加へ、拾四年下期末決算尻は壹千參百六拾萬圓を超ゆるに至つた。即ち之を拾年前の四年上期末(井上現事務就任のとき)に比すれば無慮七倍に當る。其の詳細は次の如し。

貸借對照表十年前比較表

科 目	資 産 之 部		負 債 之 部	
	十四年下期	四年上期	十四年下期	四年上期
建設費	三、九七九千圓	一、九二〇千圓	資本金	一、〇〇〇千圓
假拂金	二八	七	積立金	七〇一
未收入金	九	六	借入金	三〇〇
貯藏品・所有土地・預金等	二五五	一三	未受金及び	二八
未拂込株金	四、八七五	六六	当期利益	七〇七
合 計	一三、六二七	一、九三三	及び繰越金	七〇七
			合 計	一三、六二七
				一、九三三
				(+)(+)(-)(-)(+)(+)
				二、六二七

帳簿上の資産超過額

右表に據れば、資産の部に於て建設費の五倍し、所有金品の百拾倍せるが目立ち、負債の部に於て借入金・假受金・未拂金の減少に反し、積立金の計上されたこと、殊に會ては缺損状態に在つたものが一變して多額の利益を生み出すに至つたことが眼を惹く。更に正味資産を算出すれば、財政良化の關係は一層鮮明となる。

即ち上表の如く、四年上期には拂込株金を凌駕する程の負債を有し、正味資産は辛ふじて拂込株金と辻褃を合はすだけに過ぎなかつたが、拾四年下期に於ては八拾五萬五千圓の資産超過(各種積立金及繰越益金)を示し、其の超過額は拂込株金に對し壹割貳分方に相當する。

ではあるが、當會社の眞實の強味は建設費の割安なる一點にあるを以て、資産内容を解剖すれば、隠れたる正味資産は帳簿上の資産超過額よりも遙に多額に達するのである。

正味資産比較表

科 目	十四年下期	四年上期
資産總額	一三、六二七千圓	一、九三三千圓
当期分配金	五九四	〇
未拂込株金	四、八七五	六六
差引	八、一四八	一、三六七
外部負債	一六	七四三
再差引正味資産	七、九八〇	六四四
拂込株金	七、二三五	六四四
對株金割合	一一二	一〇〇

割安の電車建設費

一哩當り拾貳萬參千五百圓

當會社の總資産八百拾五萬圓中の四分三を占むる建設費の内容は、次の通りに分類されてゐる(十四年下期決算に従ふ)

電車建設費 參、七參四、八壹八円 (一哩當り) 壹貳參、四四九、四〇
 電燈建設費 壹、壹〇八、參六九円 (一哩當り) 壹參、九貳

当期分配金	五九四	六三〇
未拂込株金	四、八七五	六三六
差引	八、一〇六	一、三六七
外部負債	一六六	七四三
再差引正味資産	七、九四〇	六三四
拂込株金	七、二三五	六三四
對株金割合	一一二	一〇〇

(各種積立金及繰越益金)を示し、其の超過額は拂込株金に對し壹割貳分方に相當する。
 ではあるが、當會社の眞實の強味は建設費の割安なる一點にあるを以て、資産内容を解剖すれば、隠れたる正味資産は帳簿上の資産超過額よりも遙に多額に達するのである。

割安の電車建設費

一哩當り拾貳萬參千五百圓

當會社の總資産八百拾五萬圓中の四分三を占むる建設費の内容は、次の通りに分類されてゐる(十四年下期決算に従ふ)

電車建設費	參、七參四、八壹八 ^円	貳九、九六八 ^哩	壹貳參、四四九、四〇〇
電燈建設費	壹、壹〇八、參六九	七九、六貳六 ^灯	壹參、九九貳
電力建設費	貳、壹貳、參九貳	貳、〇七貳 ^{馬力}	壹〇、貳五〇
遊園地建設費	壹、七參、〇九六	……	……
總計	五、九七九、壹六參	……	……

先づ之を前例に慣つて四年上期末の状況と對照するに

科目	十四年下期	十四年上期	比較
電車一哩當り建設費	壹貳參、四四九 ^円	九壹、壹七四 ^円	(+) 參貳、貳七五 ^円
電燈一燈當り建設費	壹參、九九貳	參六、五九九	(-) 貳貳、六六七

電車建設費單價は、線路改良、車輛改善に基く當然増加の上に、物價騰貴に依る自然的影響を蒙つて、一哩當り參萬貳千餘圓即ち參割五分高に當るが、此の増加は設備の優劣を云爲する迄もなく承認し得る所であらう。次に電燈建設費單價は、供給區域の擴大に拘らず、點火燈數の密度を加へた爲めに六割貳分安となつてゐる。(電力建設費比較省略)

兎に角、帳簿價格に評價上の手加減を用ひたことなく、寧ろ毎期壹萬圓づゝ既に八回に亘つて八萬圓の減價銷却を行つた結果が右の通りの數字となつて現はれたもので、謂はゞ正味の原價勘定と言ふべきである。

平均建設費の半額に満たず

處が、當會社の建設費を以て他の同業會社と對照すれば、一見して當會社建設費が異常の割安であることを知るであらう。

郊外電車一哩當り建設費比較表

社名	電車建設費	線路巨長哩	巨長一哩當り	延長一哩當り	算出時期
城東電軌	二、一九七、九九四 ^圓	三、〇八	五七、四三〇 ^圓	二八、九二〇(推定)	十四年下期
京濱電鐵	九、四〇九、七三三	一七、六	五三、一六七	二六、七三〇	同 年 上 期
目黒蒲田	三、九三九、〇七	八、三	四七、四八〇	三七、二九〇	同
王子電軌	二、三三七、九四〇	五、三	四三、三六六	三〇、一八三(推定)	同 年 下 期
玉川電鐵	四、九三二、八五六	二、九	四一、四八一	二七、三〇〇(推定)	同
京成電軌	八、八六六、六四〇	二、五	三六、九〇三	一八、〇五二	同 年 上 期
京王電軌	三、七三三、八八	一、四、五	二五、七三三	二二、四九九	同 年 下 期

正味資産は株金の六割超過

以上七社の建設費を通過するに、目黒蒲田と王子電軌とは略ぼ中間に位してゐるから、假に兩社の建設費を折衷したものを一〇〇と假定し、各社の一哩當り建設費の指數を算出すれば次のやうになる。

城東電軌	壹貳九・貳	目黒蒲田	壹〇六・〇	京成電軌	七六・參
京濱電鐵	壹貳〇・〇	王子電軌	九參・八	京王電軌	五五・壹

即ち當會社一哩當り建設費は城東電軌の四掛參分に止まり、各社の一哩當り建設費平均額に比するも

五掛に過ぎぬ有様である。仍て如上の標準指數に基いて當會社の建設費を評價すれば無慮七百萬圓に該當すべく、さすれば帳簿價格との鞘は參百貳拾餘萬圓と註せられ、之に積立金其他帳簿に現はれた超過資産八拾五萬五千圓を加ふるときは、當會社の正味財産の實價は、拂込株金に對し約拾六割に相當する次第である。宜なるかな、當會社株式の市場に於ける取引を觀るに、五拾圓拂込済のものを八拾圓臺に評價してゐる。尤も恒久的配當率壹割參分を以てすれば、株價八拾圓として八朱壹厘強の利廻りに當り、他の堅實株の七朱臺に買はれてゐる際なれば、當會社株式の八拾圓臺を保持する所以は、別に訝しむに足らぬであらう。

収益状態の順況

収入の半分は利益となる

圖表に示したやうに當會社の創業時代は缺損相踵ぎ、設立後五ヶ年拾期間の收支は差引四萬壹千餘圓の支出超過に終つた。數次の重役更迭を経て井上現事務が就任して後は、極力事業の進捗を期すると共に經費の節減を圖り、五年下期に至つて始めて收支適合し五朱の初配當を行つた次第は冒頭「生ひ立」の記に述べた通りである。爾來五ヶ年拾期間に於ては、平均収入貳拾四萬五千圓に對し支出は拾九萬壹千圓で收支歩合七八%を示し、配當率も六朱より七朱、八朱、壹割と増すことを得た。次で後の五ヶ年拾期間は、社内も整頓し、業務も順風に帆を揚げたやうに限りなく發展を遂げたので成績も著しく向上し、平均收支歩合は四七%を示すに至つた。之が爲め配當率を壹割より壹割貳分に、更に拾參年下期以降壹割參分に増加して今日に至つたが、最近拾四年下期決算に據るも、諸般設備の改善と各種新規施設に對し、失費少なからざる場合なるにも拘らず、收支歩合は尙且つ四七%を出でざるに徴すれば、大體現状を持續し得るものと考へて妨げないであらう。

好成績を擧げる所以

然らば當會社は何故に順況に處して行けるかと言ふに、其の原因は主として建設費が他社に比し著しく割安であるお蔭で、収入總額は少くとも利益歩合が高まる結果である。此の點に就て、次の統計は最も雄辨に這般の事情を裏書してゐるものと思ふ。

各社収入及利益率比較表

社名	營業線路一哩當り運輸收入	順位	對株金利益率	順位	對電車建設費利益率	順位	電車建設費	順位
京王電軌	三九、九七一	四	一〇、九七	三	二、三〇	一	二三五、四四三	一
王子電軌	九六、六二〇	一	二〇、六	二	二、一〇	二	四九〇、九〇〇	四
玉川電鐵	四三、九三三	三	二、一八	一	一、三六	四	三三七、七五	三
京濱電鐵	七六、三七八	二	一、四	四	一、四〇	三	五三七、六六	五
京成電軌	三三、八〇三	五	一、六一	五	〇、六	五	三五八、九七三	二

【備考】 本表は十四年十一月一日附ダイヤモンド誌所載に係り、算出の根據は總て十四年上期考課狀に基く。

右表に従へば収入率の最も高き王子電軌が利益率も高かるべき筈であるに拘らず、總資本に對する率に於ては玉川に劣り、電車資本に對する率に於ては京王に遜る所以のものは、畢竟同社の建設費が割高だからである。之に反して京王は収入率は第四位であるに拘らず對電車資本利益率に於て第一位を占むるわけは、偏に建設費割安の餘慶に外ならぬ。故に當會社が這の特長を磨滅することなく、而も時勢の進運に伴ひ機宜の施設を興ることなきに於ては、社礎は彌々鞏く、社運は萬々歳たるべき筈である。況んや當會社の乗車賃金は他社に對し比較的低率を示し、収益の源泉は綽々たる弾力を有するわけである。

收支比較 對照

平均收入 一四、五八三円
平均支出 一八、四四七円

創業者時代 (第一期)
刷新時代 (第二期)

収入

平均収入 二四、五二七円

平均支出

刷新時代 (第一期)
創業者時代 (第二期)

收支比較
對照圖



平均收入 一四、五八三元
平均支出 一八、四四七円

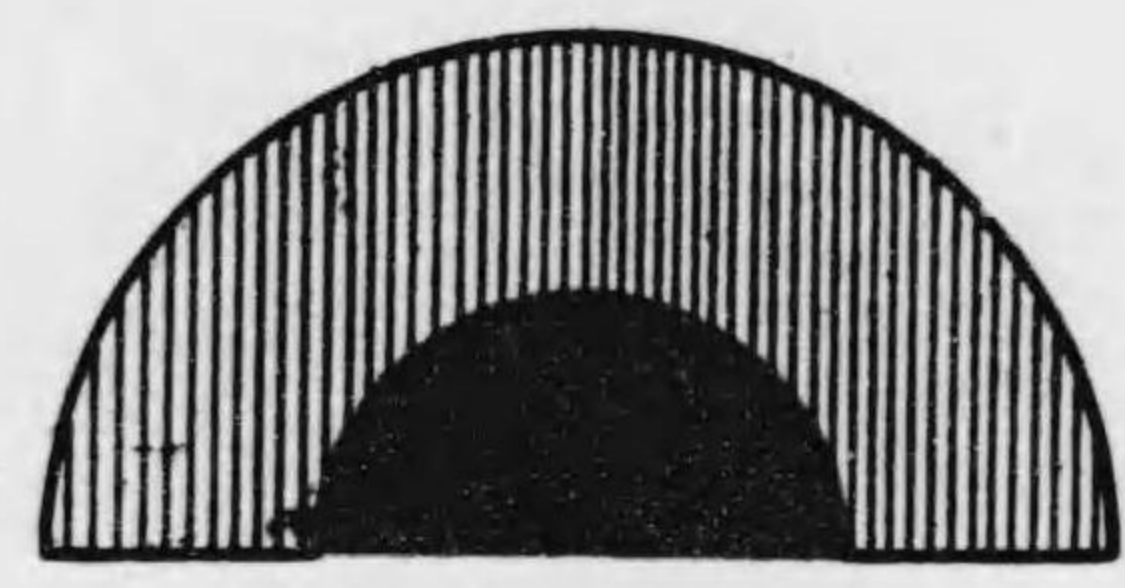
代時業創
(期一第自)
(期十第至)

平均收入 二四、五、二七七円
平均支出 一九、〇八六円

代時新刷
(期一十第自)
(期十二第至)

平均收入 六〇、一三三五円
平均支出 二六、二六二円

代時実充
(期一廿第自)
(期廿第至)

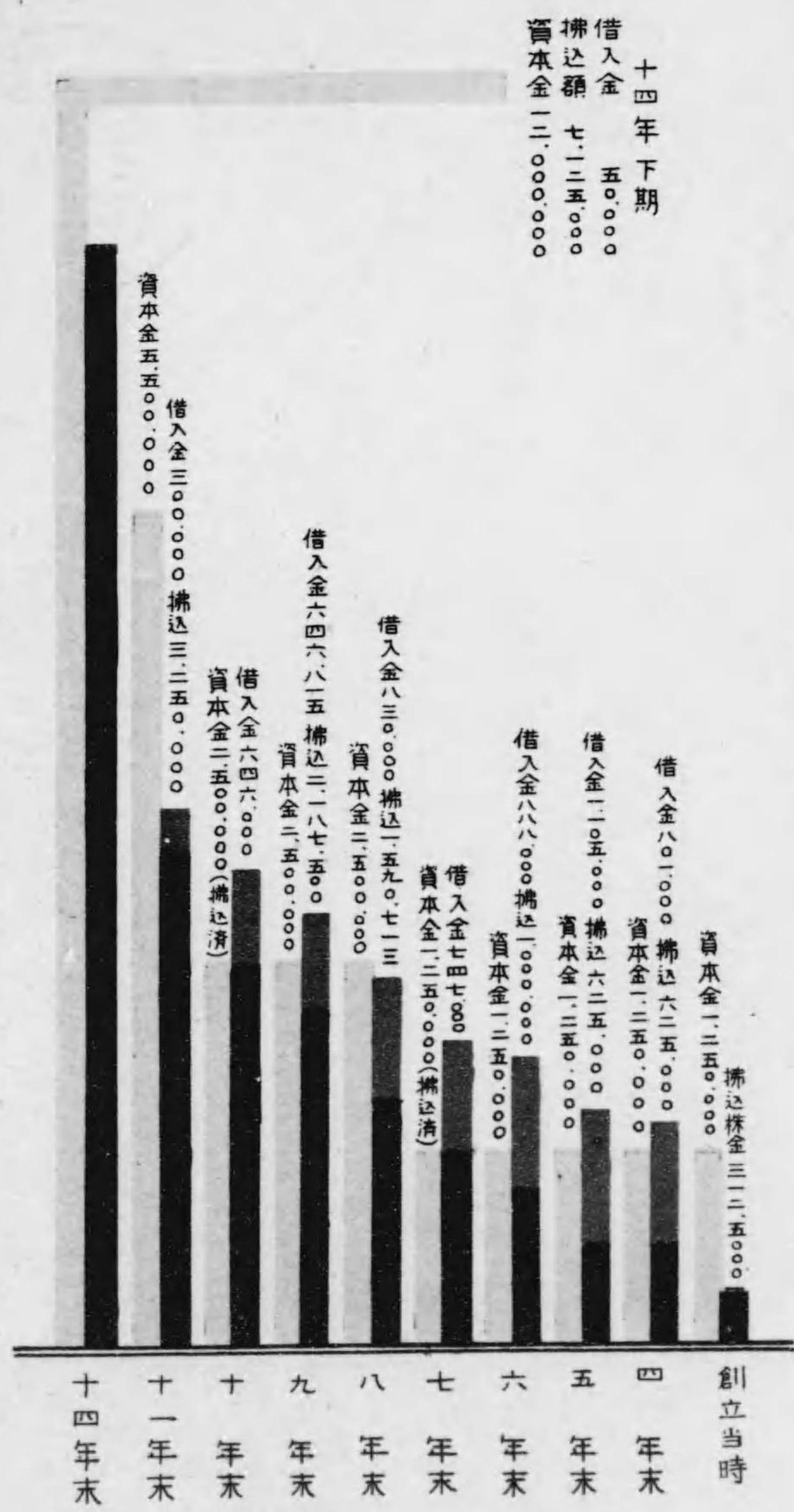


總收入 一、〇七九、六五三元
(期一廿第)期下年四十正大

資本金関係

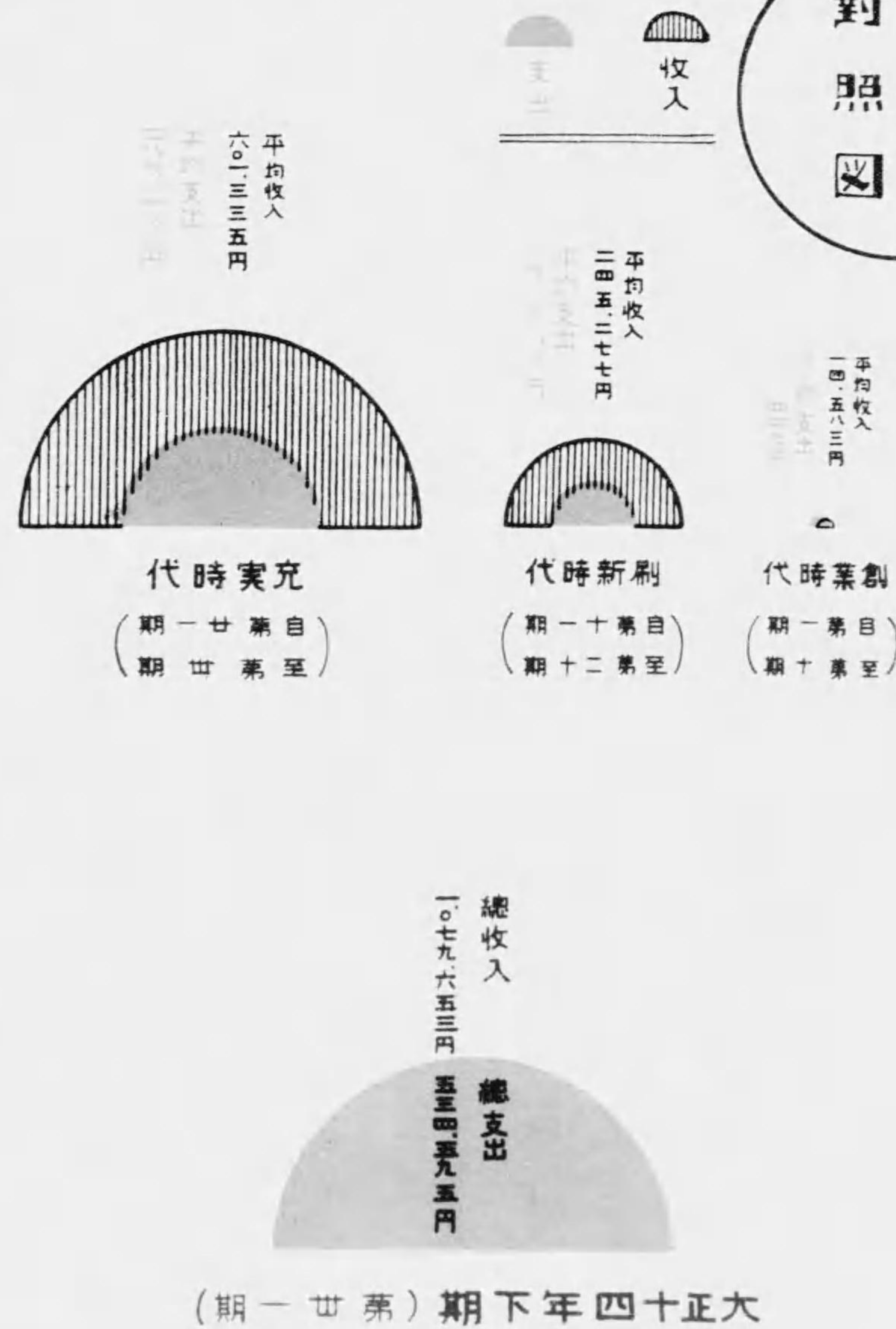
例凡

借入金
拂込株金
公稱資本金



右表に従へば収入率の最も高き王子電軌が利益率も高かるべき筈であるに拘らず、總資本に對する率に於ては玉川に劣り、電車資本に對する率に於ては京王に遜る所以のものは、畢竟同社の建設費が割高だからである。之に反して京王は収入率は第四位であるに拘らず對電車資本利益率に於て第一位を占むるわけは、偏に建設費割安の餘慶に外ならぬ。故に當會社が這の特長を磨滅することなく、而も時勢の進運に伴ひ機宜の施設を興ることなきに於ては、社礎は彌々鞏く、社運は萬々歳たるべき筈である。況んや當會社の乗車賃金は他社に對し比較的低率を示し、収益の源泉は綿々たる弾力を有するわけである。

收支比較
對照圖

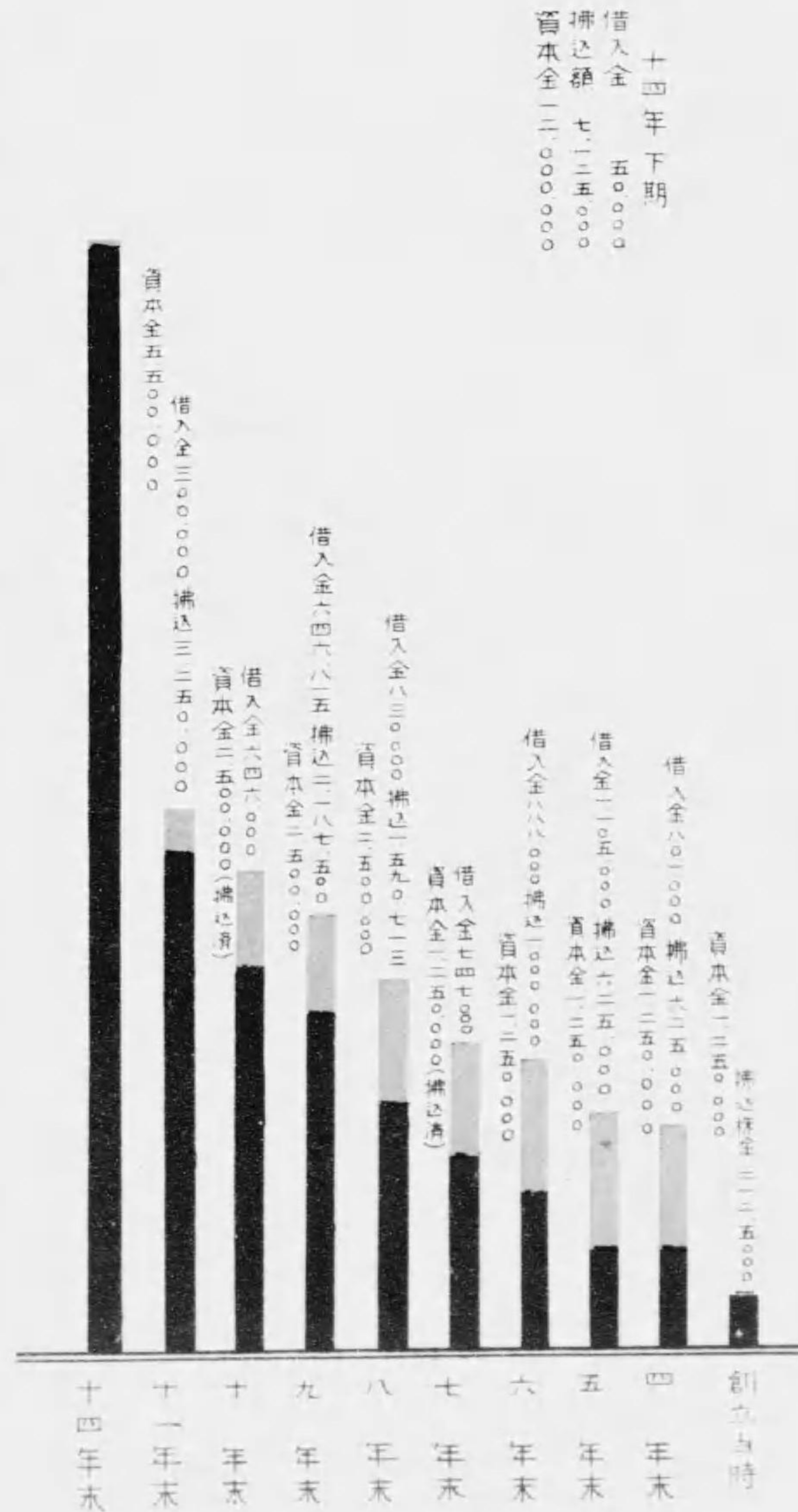


右表に從へば収入率の最も高き王子電軌が利益率も高かるべき筈であるに拘らず、總資本に對する率に於ては玉川に劣り、電車資本に對する率に於ては京王に遜る所以のものは、畢竟同社の建設費が割高だからである。之に反して京王は収入率は第四位であるに拘らず對電車資本利益率に於て第一位を占むるわけは、偏に建設費割安の餘慶に外ならぬ。故に當會社が這の特長を磨滅することなく、而も時勢の進運に伴ひ機宜の施設を誤ることなきに於ては、社礎は彌々鞏く、社運は萬々歳たるべき筈である。況んや當會社の乗車賃金は他社に對し比較的低率を示し、収益の源泉は綽々たる弾力を有するわけである。

資本金關係

例凡

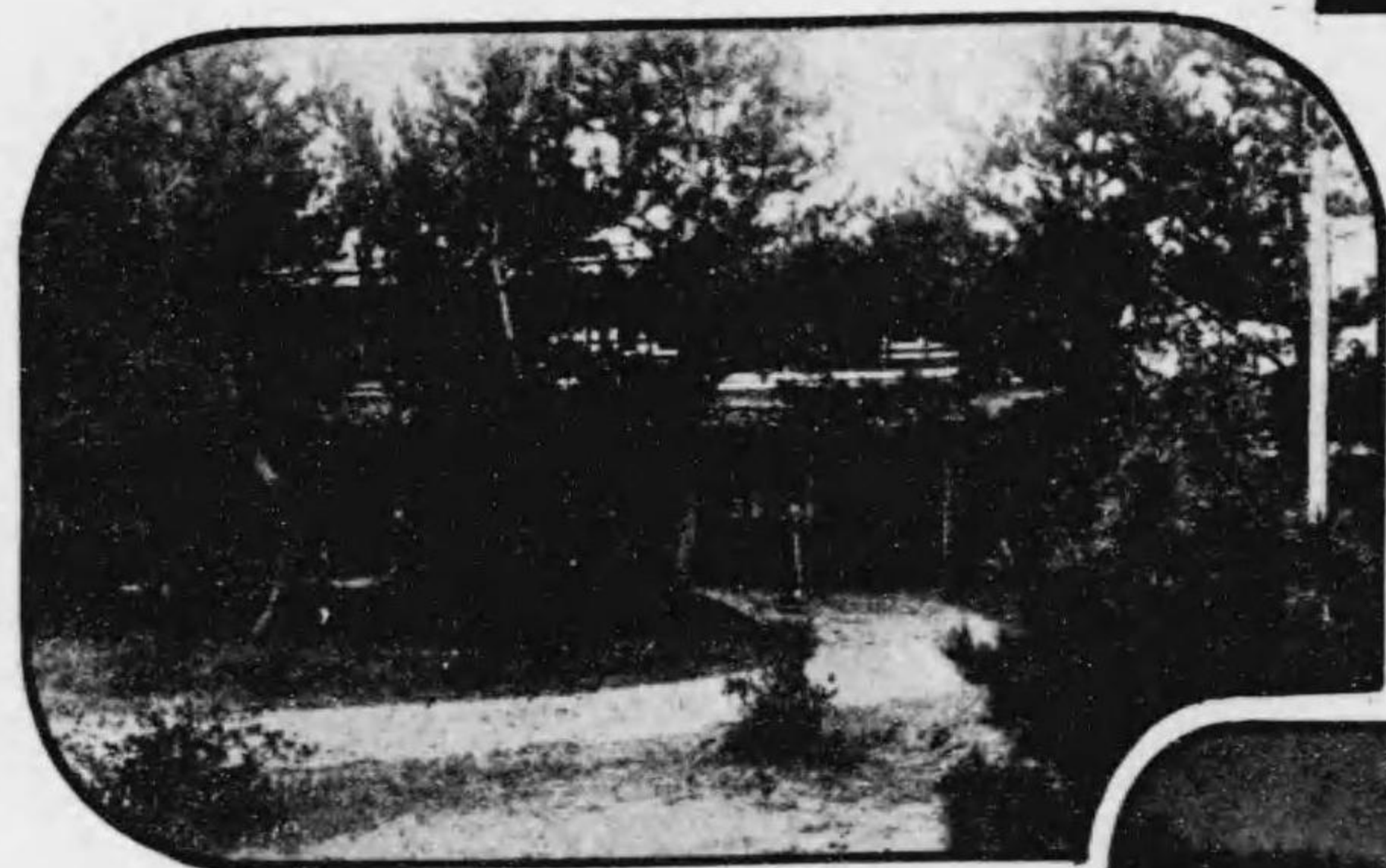
借入金
拂込株金
公稱資本金



和泉
玉翠園



多摩川原
江戸前

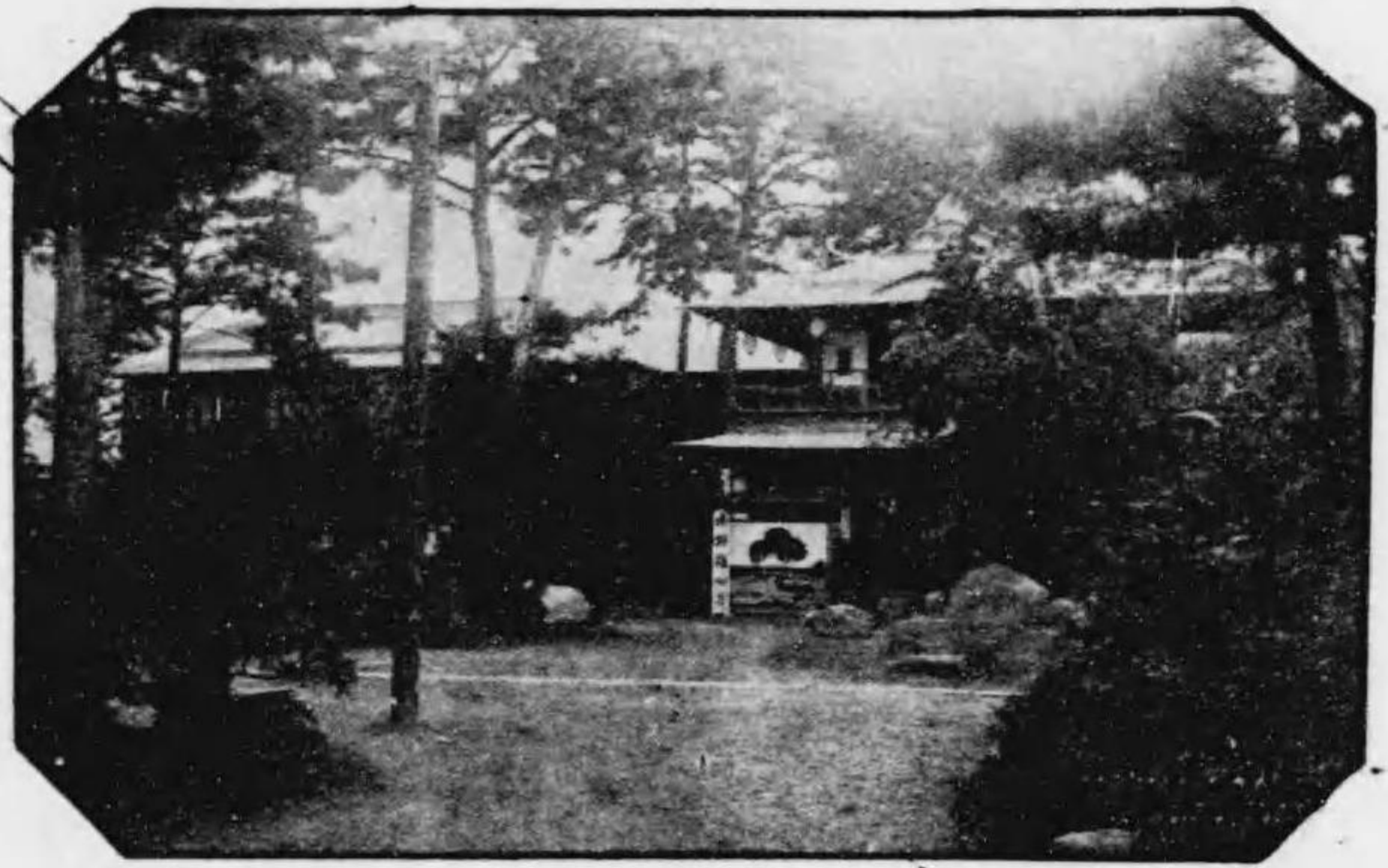


多摩川原
玉翠園



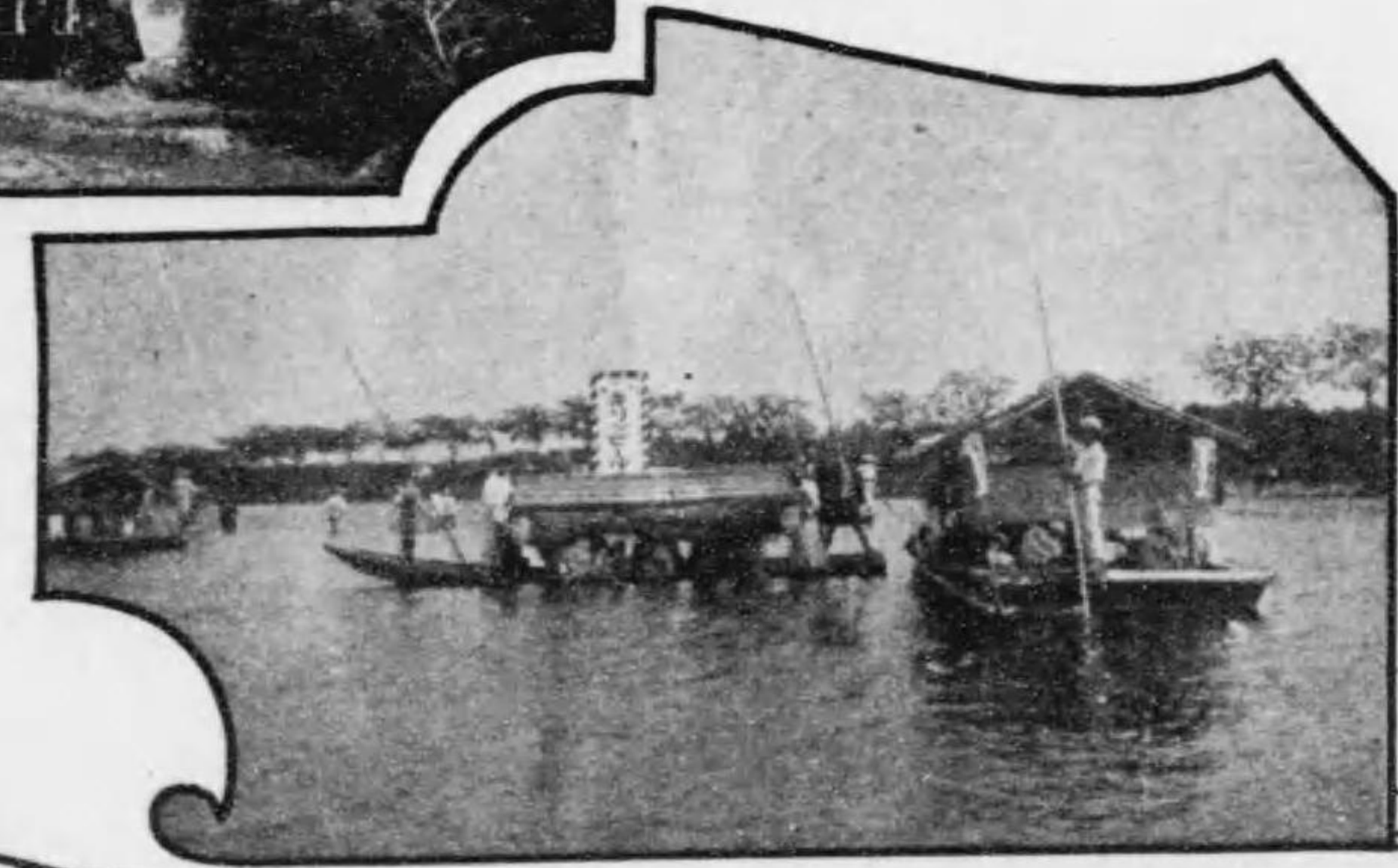
調布
玉川亭





阿波
屋敷
船

多摩川系
塚善



下高井戸
吉田園

多摩川系
玉華樓





京王線玉南線聯絡切符
東京
新宿遠分より

八王子まで
片道五十九銭

高尾山麓まで
片道九十五銭
(自働車聯絡)

高尾の紅葉

鮎魚御茶内

王華樓
塚善
玉川亭
富士見亭
玉喜
和泉
玉翠園

お休みどころ
多摩川原 江白前
京王亭 新多摩川
多摩原 亀屋
府中 高尾松本
関戸 井上亭

稲田堤の櫻

郊外電車一哩當り乗車賃金

省線	二・五 <small>錢</small>	京王	二・六 <small>錢</small>	玉川	二・九 <small>錢</small>	目黒蒲田	三・六 <small>錢</small>	池上	三・八 <small>錢</small>
京成	二・五	王子	二・六	京濱	三・三	城東	三・六	四武	四・四

【備考】本表は十四年十二月十八日附時事新報掲載「郊外電車の解剖」と題する記事より摘録せるもの。

創立以來收支明細每期對照表

支入の部 支出の部

郊外電車一哩當り乗車賃金

省線 二・五	京王 二・六	玉川 二・九	目黒蒲田 三・六	池上 三・八
京成 二・五	王子 二・六	京濱 三・三	城東 三・六	四武 四・四

【備考】本表は十四年十二月十八日附時事新報掲載「郊外電車の解剖」と題する記事申より摘録せるもの。

創立以來收支明細毎期對照表

期別	収入の部				支出の部				
	運輸	電燈	雑収入	合計	運輸	電燈及	總係	諸税金	
明治四十三年下期	0	0	0	0	0	0	0	0	未開業に付建設費中繰込む
明治四十四年上期	0	0	0	0	0	0	0	0	0
明治四十四年下期	0	0	0	0	0	0	0	0	0
明治四十五年上期	0	0	0	0	0	0	0	0	0
大正元年下期	0	0	0	0	0	0	0	0	0
大正二年上期	六、三五二	三、一七五	五三一	九、九五七	五、〇五四	二、〇三三	九〇	七、一六八	七、一六八
大正二年下期	二、三二〇	五、八六三	八二六	二七、九八九	二七、七八四	四、三三三	一〇、〇一九	〇	四三、一三九
大正三年上期	二〇、一三五	六、七八八	六二七	二七、五三一	二五、九四〇	五、九一三	一一、五六六	〇	四一、四二〇
大正三年下期	三三、三六四	七、七五〇	七八四	三〇、八九九	三三、四六五	四、七二六	一一、〇七九	〇	三八、三七〇
大正四年上期	三三、九五〇	八、三三八	一、一一八	三三、四六六	一八、一四〇	四、六五三	三三、六三三	〇	五五、四七六
大正四年下期	三三、〇七八	一〇、三四二	三六、三五八	八二、七七九	一六、四三四	四、九七九	三八、九一九	一九〇	六〇、五二四
大正五年上期	三六、三三三	一五、〇九三	三三、〇七七	八三、五〇三	一六、六六〇	七、三二七	三四、九六九	一一	五八、八六九
大正五年下期	五七、七四二	三三、三七六	二九、五〇〇	一一〇、六二〇	三五、〇九三	九、五九八	三六、九九三	七〇三	七二、七八
大正六年上期	六一、四三七	二七、七四九	九、四三三	九八、六四〇	二八、四九六	一一、九九九	二六、八八六	二、三九〇	六九、七六二
大正六年下期	七五、二八二	三三、一三三	三、六七九	一一〇、二六	三三、〇三〇	一一、八二七	三三、二九四	一、四〇〇	八〇、六八五
大正七年上期	八二、二六七	三九、二〇六	五七八	一二一、〇五二	三三、九三八	一三、六三三	二九、四五四	四、二四九	八二、二七六
大正七年下期	一〇一、〇二二	四五、五二〇	一、三九七	一四八、九三二	三九、八〇一	一五、五九三	三一、九四四	四、七四七	九三、〇八六
大正八年上期	一一六、四一八	五八、七二五	一、一〇四	一七六、二三八	五一、八九四	一七、七六〇	二八、五三六	六、二六二	一〇四、四三三
大正八年下期	一四七、九八四	七六、二二三	三、一九〇	二二七、三八八	六五、五四〇	二八、八八七	三一、三四四	八、三七五	一三四、一四八
大正九年上期	一九八、五五二	九三、八七六	一、一八七	二九三、六〇三	八五、三二一	三三、六三八	二九、〇八五	九、六二五	一五六、六六〇
大正九年下期	二二八、九七三	九九、七一九	二、七九〇	三三二、四八三	八八、〇〇一	二八、一九七	三三、六六六	一九、四七九	一七三、四四三
大正十年上期	二四一、一六二	一一一、〇七八	一、九八五	三五四、一四五	一〇一、〇〇一	三五、七七七	四一、九七七	一四、〇三〇	一九二、五六一
大正十年下期	二七七、六五五	一二一、七〇八	一、〇九六	四〇〇、四六八	一〇九、一〇三	三六、〇四六	三三、三四五	二〇、四五九	一九六、九五一
大正十一年上期	三〇二、五五〇	一四一、九〇三	八、五一一	四五二、〇〇八	一二三、〇二七	四三、六八八	三九、五三三	二五、六六八	二二二、九一九
大正十一年下期	三三二、七一九	一五九、三六〇	三、四四六	四九四、七五九	一五二、三三七	四八、二六四	三七、五九五	二六、八〇九	二六四、九〇六
大正十二年上期	三六六、四一〇	二〇一、三三四	一九、五三〇	六〇七、二八五	一五六、二九七	七一、六二四	二八、八二〇	二五、四八三	二八二、二二一
大正十二年下期	四〇〇、八二六	二二〇、五六一	二二、八二八	六四四、一七七	一三四、五七七	七〇、四四三	三三、六五六	三〇、〇一一	二七七、七五四
大正十三年上期	五二〇、九一〇	二九九、七五四	二四、六六五	七四四、八二二	一七九、七三九	一一〇、一五一	四四、六五四	三〇、八八五	三三四、六五七
大正十三年下期	六〇〇、四六二	二八一、二三四	二七、〇九七	九〇八、八〇二	二三四、〇一四	一五四、一七〇	五、四五九	三三、八六〇	四一六、五〇五
大正十四年上期	六四六、四三八	三〇七、九三四	……	九六〇、三六五	二五七、九三三	一九三、六二二	……	一五、一五一	四六六、六九五
大正十四年下期	六八二、六〇〇	三九七、〇〇四	……	一〇七九、六〇四	三〇五、〇八四	二〇八、一六六	……	二二、二四五	五五五、五九五



株主人員數と持株數内譯

決算期回数	五拾株未満	五拾株以上 壹百株未満	壹百株以上 貳百株未満	貳百株以上 五百株未満	五百株以上	壹千株以上	合計
第一回	一〇二人	六八人	七二人	二五人	八八人	〇人	二七五人
第二回	一二九人	七八人	六八人	二三人	九九人	〇人	三〇七人
第三回	一二九人	七八人	六八人	二三人	九九人	〇人	三〇七人
第四回	一二六人	七五人	六二人	二〇人	一一人	〇人	二九四人
第五回	一二三人	七五人	六一人	二〇人	一一人	〇人	二九二人
第六回	一二六〇人	七五人	六〇人	二〇人	一一人	〇人	二九七人
第七回	一二六〇人	七五人	六〇人	二〇人	一一人	〇人	二九七人
第八回	九六人	二九人	四五人	二五人	七八人	〇人	二〇二人
第九回	一〇二人	二五人	四五人	二五人	七八人	〇人	二〇四人
第十回	九八人	二二人	三九人	二二人	二九人	〇人	一九三人
第十一回	一〇一人	一九人	四一人	二二人	二二人	〇人	一九四人
第十二回	九二人	一七人	四一人	二〇人	二三人	〇人	一八四人
第十三回	九〇人	一七人	四一人	二〇人	二三人	〇人	一八五人
第十四回	九〇人	一七人	四一人	二〇人	二三人	〇人	一八五人
第十五回	九〇人	一七人	四一人	二〇人	二三人	〇人	一八五人
第十六回	八七人	一八人	四五人	一六人	二二人	〇人	一七七人
第十七回	八五人	二〇人	四五人	一六人	二二人	〇人	一七七人
第十八回	一一人	二三人	三〇人	五四人	一五人	〇人	二二三人
第十九回	一一九人	三一人	六三人	六三人	二七人	〇人	二七九人
第二十回	一一九人	三一人	六三人	六三人	二七人	〇人	二七九人
第二十一回	一一〇人	三一人	四〇人	六六人	一〇人	〇人	二七三人
第二十二回	一一三四人	三一人	三六人	七三人	一〇人	〇人	二九一人
第二十三回	一一三四人	三一人	三六人	七三人	一〇人	〇人	二九一人
第二十四回	一一三三三	三三人	四四人	七五人	一〇人	〇人	二九三人
第二十五回	一一三三三	三三人	四四人	七五人	一〇人	〇人	二九三人
第二十六回	一一三三三	三三人	四四人	七五人	一〇人	〇人	二九三人
第二十七回	一一三三三	三三人	四四人	七五人	一〇人	〇人	二九三人
第二十八回	一一三三三	三三人	四四人	七五人	一〇人	〇人	二九三人
第二十九回	一一三三三	三三人	四四人	七五人	一〇人	〇人	二九三人
第三十回	一一三三三	三三人	四四人	七五人	一〇人	〇人	二九三人
第三十一回	一一三三三	三三人	四四人	七五人	一〇人	〇人	二九三人

役員の移動と在職期間

氏名	役員	就任年月	退任年月	在職期間	摘	要
川田 鷹	取締役	明治四十三年	大正七年五月	七年九月	内取締役會長	
利光 丈平	同	同	大正三年五月	三年九月	在任中	
豊原 基直	同	同	大正元年十二月	二年三月	專務取締役	

第二十五回	二三六	四六	五二	一〇五	二六	一〇	四七五
第二十六回	二二九	五三	六〇	九七	二八	一一	四八八
第二十七回	二四三	五二	六二	一〇一	二六	一一	四九五
第二十八回	二五四	六一	六七	一一二	二二	一一	五二七
第二十九回	二六二	七四	六五	一一一	二一	一三	五四六
第三十回	二六六	七五	七二	一一五	一八	一二	五五八
第三十一回	(増資) 四六二	一四七	一四三	一三五	六七	三四	九八八

役員の移動と在職期間

氏名	役員	就任年月	退任年月	在職期間	摘要
川田 鷹	取締役	明治四十三年	大正七年五月	七年九月	内取締役會長 四年六月
利光 丈平	同	同	大正三年五月	三年九月	在任中 專務取締役
豊原 基臣	同	同	大正元年十二月	二年三月	同
太田 信光	同	同	大正三年五月	三年九月	同
井上平左衛門	同	同	大正八年三月	八年六月	同
井倉 和欽	同	同	明治四十四年一月	五月	同
濱 太郎	取締役	同	大正二年一月	二年五月	同
吉田 幸作	監査役	同	大正三年五月	三年九月	同
岡 烈	監査役	同	大正六年五月	六年九月	同
磯部 保次	取締役	大正二年六月	大正三年四月	十月	内監査役三年九月 取締役三年
辰澤 延次郎	同	同	大正三年五月	十一月	同
吉村 銀次郎	同	同	同	同	同
小田切 忠四郎	同	大正三年五月	大正十四年六月	十一年三月	内專務取締役 一年一月
藤井 諸照	同	同	同	同	内取締役會長 九年十一月
渡邊 嘉一	監査役	同	現	十一年七月	内監査役四ヶ年 取締役七年七月
伊藤 幹一	監査役	同	大正四年六月	一年一月	同
井上 篤太郎	取締役	大正四年六月	現	十年六月	專務取締役 十年六月
山口 憲	監査役	同	大正十一年六月	七ヶ年	同
榛葉 良男	取締役	大正五年十二月	現	九ヶ年	同
金光 庸夫	同	大正六年六月	同	八年六月	同
上山 良吉	監査役	大正七年六月	同	七年六月	同
榎本 藤次郎	取締役	大正八年六月	同	六年六月	同
井上平左衛門	監査役	同	大正九年六月	一ヶ年	第二世襲名
上原 喜作	同	大正九年六月	大正十一年六月	二ヶ年	同
井上平左衛門	同	大正十一年六月	現	三年六月	再任に付累算 四年六月
島田 竹三郎	同	大正十一年六月	大正十二年十月	一年五月	同
村野 儀右衛門	同	大正十三年六月	現	一年六月	同
津田 興二	取締役	大正十四年六月	同	六ヶ月	同
山口 意	同	同	同	六ヶ月	再任に付累算 七年六月
和田 豊治	相談	大正三年七月	大正十三年三月	九年九月	同
森村 開作	同	同	現	十一年五月	同
植村 俊平	同	大正十四年一月	同	一ヶ年	同

社員従業員の増加趨勢

期別	重役	事務員	技術員	運送員	職工	雑夫	合計
明治四十三年下期	九人	七人	一人	〇人	〇人	一人	一人
明治四十三年上期	八人	七人	一人	〇人	〇人	一人	一人
明治四十三年下期	八人	六人	三人	〇人	五人	一人	三人
明治四十三年上期	八人	五一人	五人	〇人	五一人	一人	三人
大正元年下期	八人	二六人	二四人	〇人	五九人	三人	二二〇人
大正元年上期	六人	二六人	二五人	〇人	六一人	一人	一六〇人
大正二年下期	七人	二〇人	二五人	二五人	六〇人	一人	一三九人
大正二年上期	七人	一八人	二二人	二五人	六一人	一人	一四〇人
大正三年下期	七人	二一人	二四人	三三人	五三人	一人	一四一人
大正三年上期	六人	一九人	二八人	三三人	五三人	一人	一四一人
大正四年下期	八人	一七人	二七人	三七人	四三人	一人	一二二人
大正四年上期	八人	一七人	二七人	三七人	四三人	一人	一二二人
大正五年下期	八人	一九人	二八人	三七人	四三人	一人	一二二人
大正五年上期	八人	一七人	二七人	三七人	四三人	一人	一二二人
大正六年下期	八人	一七人	二七人	三七人	四三人	一人	一二二人
大正六年上期	八人	一七人	二七人	三七人	四三人	一人	一二二人
大正七年下期	九人	一八人	二八人	三七人	四三人	一人	一五三人
大正七年上期	八人	一七人	二七人	三七人	四三人	一人	一五三人
大正八年下期	八人	一七人	二七人	三七人	四三人	一人	一五三人
大正八年上期	八人	一七人	二七人	三七人	四三人	一人	一五三人
大正九年下期	〇人	二〇人	二二人	八二人	三四人	一人	一六三人
大正九年上期	〇人	二〇人	二二人	八二人	三四人	一人	一六三人
大正十年下期	〇人	二二人	二五人	八七人	四〇人	一人	一七三人
大正十年上期	〇人	二二人	二五人	八七人	四〇人	一人	一七三人
大正十一年下期	〇人	二二人	二五人	八七人	四〇人	一人	一七三人
大正十一年上期	〇人	二二人	二五人	八七人	四〇人	一人	一七三人
大正十二年下期	〇人	二二人	二五人	八七人	四〇人	一人	一七三人
大正十二年上期	〇人	二二人	二五人	八七人	四〇人	一人	一七三人
大正十三年下期	九人	二三人	二五人	八七人	四〇人	一人	二〇七人
大正十三年上期	九人	二三人	二五人	八七人	四〇人	一人	二〇七人
大正十四年下期	〇人	二七人	二九人	八七人	四〇人	一人	二二四人
大正十四年上期	〇人	二七人	二九人	八七人	四〇人	一人	二二四人
大正十四年下期	〇人	二七人	二九人	八七人	四〇人	一人	二二四人
大正十四年上期	〇人	二七人	二九人	八七人	四〇人	一人	二二四人

高安寺



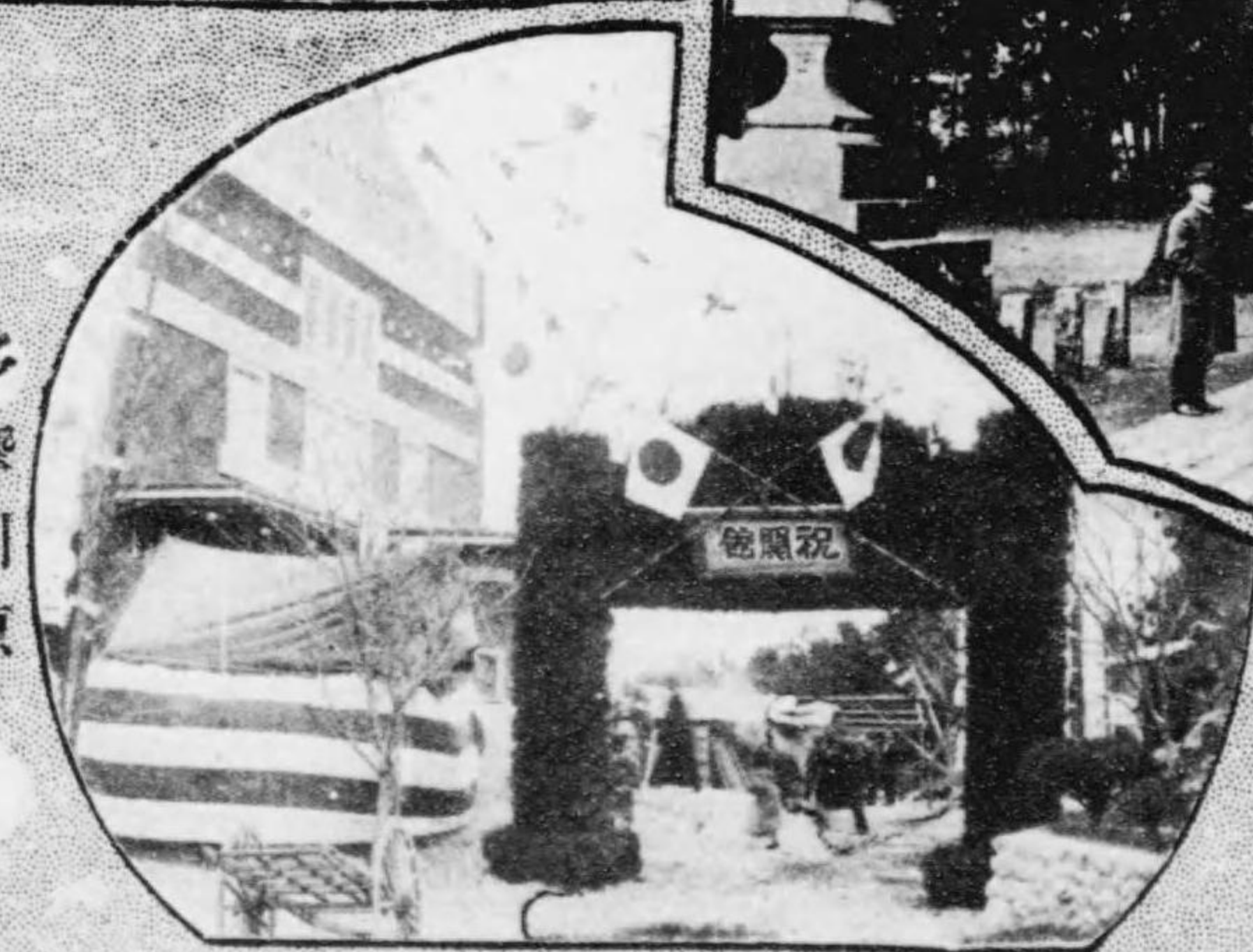
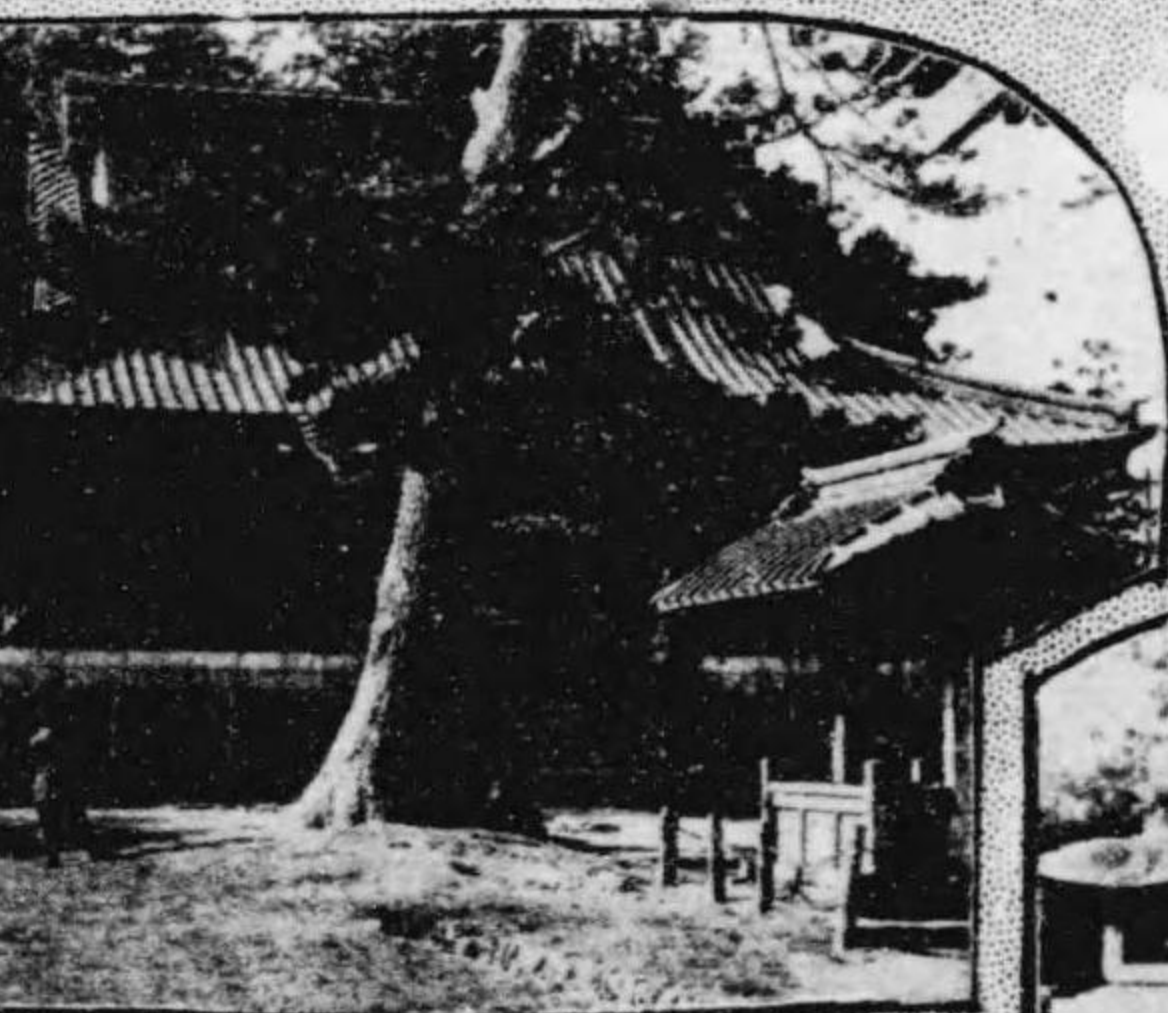
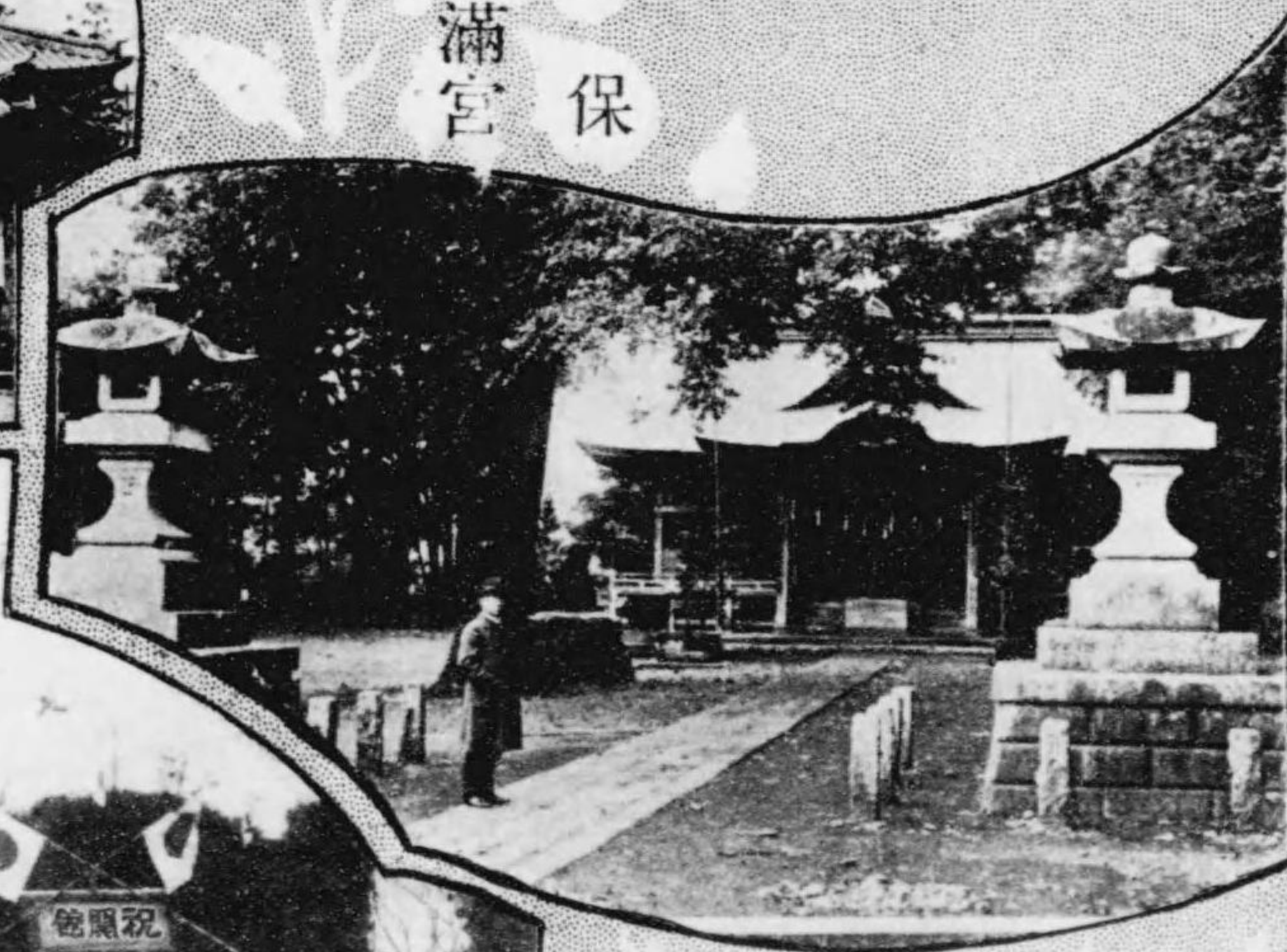
京王電車南線
沿線の風景

櫻ヶ岡より南鐵橋を望む
明治天皇行幸史蹟(關下車十町)



高安寺
山門

谷保
天満宮



多摩川原
京王演藝館

高幡
不動尊

大正十四年下期	大正十四年上期	大正十三年下期	大正十三年上期	大正十二年下期	大正十二年上期	大正十一年下期	大正十一年上期
一〇	一〇	〇九	〇九	〇九	〇九	〇九	〇九
二七	二五	二四	二三	二三	二三	二三	二三
一九	一八	一六	一五	一五	一五	一五	一五
一九〇	一八六	一七七	一二七	一一六	一一六	一一六	一一六
七五	八七	五四	四八	五〇	五〇	五〇	五〇
一四	一三	九	八	七	七	七	七
三三五	三三九	二九〇	二三〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇

114L-98



東京市麹町區土手三番町三十七番地 田嶋二事務所編纂 大正十五年一月二十日印刷發行(非賣品)

東京市麹町區土手三番町三十七番地

田嶋二事務所編纂

大正十五年一月二十日印刷發行(非賣品)



終